家庭雜誌

第貳拾九號

書物の外にも學問あり　世界は大學校なり、

歐洲諸國王家の片影　明に英國王室の現狀を見るべし、

山　土さ木さに蔽はれたる彼が秘密も、科學の光よりは彼自ら蔽ふ能はず、

寶玉雜話　眞珠の光は、最も淸く最も氣高き光なり、

朋友と助力　人情誰か二者を個々のものさなすを許さん、

工女の咄　憐むべし空しく志を霽らして在らしむこさや、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

博文館編輯局編纂　四月廿七日發賣

傳家寶典 明治節用大全

口繪彩色木版三部風景幷風俗畫（三島蕉窓。富永永洗。武內桂舟。寺島廣業）四氏密畫御宮城眞景寫眞石版。日本幷萬國地圖數葉挿入

全一册 紙數千四百頁脊皮最上美本

製本躰裁　製本一縱八寸九分橫六寸七分厚サ二寸

正價金二圓　豫約實價金壹圓五拾錢　全國一般通運料二拾五錢

豫約申込期限五月十五日迄　期限後ハ正價ニ復ス　製本既成　着金順次送本

節用の書、古來出版せられたる者十數種、皆な能く日常必需の事項を網羅し、之を坐右に備ふれば、事として辨ぜざるなく、機に臨み變に應じて、望む儘に用を逹することを嚢の物を探ぐるが如し、然れども明治の聖世と爲り、泰西の新事物をして採用することを日に多く、人間生活の必要事項は盡く面目を改む、而して其明治新天地の森羅萬象を網羅し、日常坐右の寶典と爲すべき大節用集は未だ出でず、是れ昭代の大缺典なり、弊舖久しく之を憾み、當代知名の諸大家に囑して材料を收集することこゝに數年、漸やく編次して此の書を爲す、皇室古君御歴代の系統、武家の系圖、和漢洋古今有名人物の傳記を始とし、衣服の裁縫、飲食の料理、各種の製造法、家屋の構造、室內の裝飾、庭苑の排置等は勿論男女禮式、家政整理、女子手藝の方法、香花、茶湯、音曲等の諸藝、農、工、商業、水産、養蠶、製茶等生產業の方法、男女日用公私用文例若くは歷史、地理、文學、理化學、事物起元、神社佛閣、名所舊蹟の由來、詩、歌、連俳、文の作法、和漢洋宗教の由來、開基者の傳記等總べて人間の處世上知るを要する事は、一として備はらざるなく、誠に古今來唯一の大節用集、全編大版一千四百頁の中に集めて漏さず、江湖諸彦、請ふ幸に愛讀を賜へ、

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

豫約取次　●東京堂○小野慶次郎○林平次郎○大倉孫兵衛●大阪盛文館○吉岡○柳原○梅原●京都東枝○山中●名古屋川瀬●熊本長崎次郎外全國書林

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

◎此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル様ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

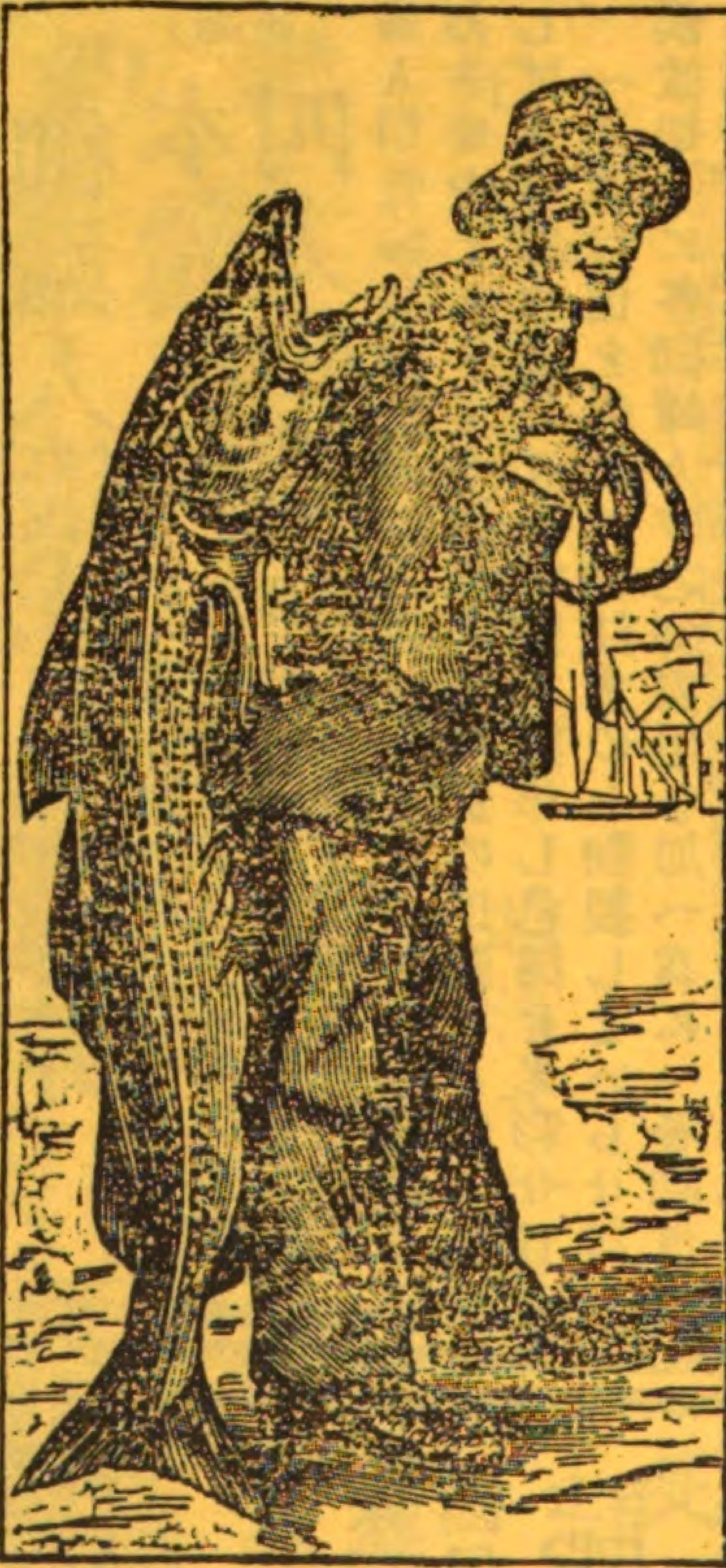
◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所 米國貿易商會

横濱廿八番

神戸十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳菓

御婦人儀式用御櫛笄

（品質）本鼈甲製
四方張製

（形狀）高髷用半京形御櫛笄各種
丸髷用半京形御櫛笄各種
花鳥類花付簪玉附簪各種
右外政子形於初形櫛笄類

御婦人用裝飾品中御儀式上には凡て鼈甲製の御櫛笄を用ゐさせたまふにより從來（其品質の正確なる物を精撰してウキ等之出てざる樣堅く製作し色澤を光彩せしめ）一見其尊位を失わぬ樣注意の上調製しまいらせ居り候故切りに各御婦人方之御需用を加へ爲に一層御信用を博し候間自來は猶御信用にそむかざらぬ樣注意に注意を重ね永年の御使用に堪へ得る物品を調製して販賣仕候條何卒御用命わらんとを偏に奉希望候

○右鼈甲御櫛笄は御用命後萬一ウキ等の出候節は其代價受取證を添へ御插被下ば丁寧に修復致すか又は他品と交換致す共貴意に隨ふべし

○みがき直し等は何時にても無代價にて可仕事

右物品は本甲製○四方張製共各種有之其色之淡濃に依り一々價を異に致せば御來車之上御高覽被下か又は御一報被下ば市內は持參貴覽に供へ可申候○市外より御注文之節は高髷用又は丸髷用其他形ち等凡そを御指示被下ば一々價を御報申上着金直ちに物品を許多之內より正撰して御送附可申上候

東京市京橋區南傳馬町貳丁目

大西白牡丹

廣告

家庭雜誌
國民之友

始全國新聞雜誌への廣告取次方迅速と確實は勿論割引大勉強にて御用便可仕候

全國諸新聞雜誌廣告大取次

東京々橋區瀧山町拾壹番地

弘報堂

電話八百五拾一

商標

ヲントレス膏

僂麻質(りうまちす)○流行感冒(いんふるゑんざ)

腰痛(こしいたみ)○痰咳(たんせき)

風邪(ひきかぜ)ニ偉効(おほひるきゝめ)アリ

定價壹拔金参拾五錢

日本一手販賣元　横濵廿八番　米國貿易商會

特約　關東大販賣所　東京日本橋區本町四丁目　藥種問屋　島田久兵衛

同　同區本町三丁目　藥種問屋　島田忠兵衛

同　同區室町三丁目　藥種問屋　資生堂

關西大販賣所　大阪東區道修町三丁目　藥種問屋　小西儀助

かな帖

獨習字用教本

多田親愛書

巻一 價金十錢郵税二錢

巻二 價金二十錢郵税二錢

通信にて授業を望む方は郵劵二錢を送れよ

この習字帖は是迄會員外に一切賣渡さゞりしが今度諸方よりのすゝめにより弘く頒布する事とはされたり今發賣するに際し敢て自賛を爲さず日本新聞の批評を代用す

（日本新聞批評）

かな文字は近來日一日と流行を極め隨てかな習字帖の出版も四五にして止まらず、多田氏の此道に妙且つ至れるは知る人の知る所にして何故に妙技を世間に顯はすの斯く遲きは知る人の惜む所なりき此の如き人にして此の如き妙技を世間に知らしめばかな文字を修んと欲するものゝ爲めに大なる利便たる云ふまでもあらじ今ま此帖を見るに流石はかな文字の老舗だけありて運筆如何にも自在俗言の所謂カレヌキたる腕前は他人の企て及ぶべきにあらず此運筆もて連綿游絲の姿態を縱横無盡に書せしめば奇觀は一層も二層も引き立つらん此帖は唯初學者の爲めなるべし而して尙ほ妙味掬するに堪へたり

發行所 神田仲猿樂町十五番地國語傳習所

日本書道通信會

賣捌 神田表神保町二番地

六合館弦巻書店

舶來流行夏物澤山着荷

歐洲流行女夏帽子○同小供帽子夏用ハンカチーフ同シヤツ○同靴足袋同皮絹手袋○束髪ピン婦人洋服附屬品等

新橋南金六町一番地

婦人洋服附屬品商

關口商廛

英國ゼームス、ブライス氏原著

人見一太郎譯述

平民政治

特別價二圓五拾錢

運賃本社自辨

右品切の處製本出來候に付陸續御注文可被下候

發行所 東京日吉町

民友社

民友社出版書概目錄

- 國民叢書 人物管見 定價拾五錢 郵稅二錢
- 國民叢書 青年と教育 定價拾五錢 郵稅四錢
- 國民叢書 靜思餘錄 定價拾五錢 郵稅四錢
- 國民叢書 文學斷片 定價拾五錢 郵稅四錢
- 吉田松陰 定價五拾錢 郵稅八錢
- グラッドストン 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 武雷土 定價拾五錢 郵稅四錢
- 格武電 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 格朗空 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 伊太利建國三傑 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 幕府衰亡論 定價卅五錢 郵稅六錢
- 新日本史 上 定價四拾錢 郵稅六錢
- 新日本史 中 定價三拾錢 郵稅六錢
- 近世歐米歷史之片影 定價貳拾錢 郵稅四錢

- 第二之維新 定價拾錢 郵稅貳錢
- 國民的大問題 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 政黨論 定價廿五錢 郵稅四錢
- 英米佛比較憲法論 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 排偽哲學論 定價拾貳錢 郵稅貳錢
- 新日本之青年 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 誕生日 定價拾五錢 郵稅貳錢
- 一語千金 定價五錢 郵稅貳錢
- 第一國民小說 定價拾五錢 郵稅四錢
- 第二國民小說 定價拾五錢 郵稅六錢
- 第三國民小說 定價拾五錢 郵稅四錢
- 歸省 定價拾五錢 郵稅四錢
- 懷舊 定價貳拾錢 郵稅四錢
- 最暗黑之東京 定價拾參錢 郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎國民新聞の本領（不羈獨立）

不羈獨立の氣魄を以て、隱然一敵國たるものあらば、國民新聞は、確かに其の一に居らむ。藩閥割據に對する國民的精神。有司專制に對する責任內閣。自屈的外交に對する自主的外交。是れ國民新聞が百厄千難を抵當として、熱心主張する所ろなり。若しそれ社會の公德を扶植し、立憲國たる善風美俗を長養し、國民の精神を陶冶し、國家の元氣を積蓄し、以て百年の大計を定めんとするが如きは、是れ國民新聞の宿志也。

◎國民新聞の眞價（新聞中の新聞）

國民新聞の眞價は新聞中の新聞たるにあり。其の着眼、恒に他に一歩を先んぜり。總て新奇なる問題は、國民新聞の爲めに看取せられ、論評せられ、說明せられ、而して漸々世間の注意を博するに到るなり。約言すれは國民新聞は、新聞中の急先鋒なり。

◎國民新聞の本色（多角的）

多角的を以て、新聞の本色とせは、國民新聞は、確かに其の一に居らむ。國民新聞は、政治問題に就て、特別の手眼を有するに係らす。清新健全なる文學。世態人情に關する同情多くして、深切なる社會的觀察。社會の血管を縱橫する思想の潮流。殖產興業、通商貿易、その他一切經濟の大勢。及び社會人事の森羅萬象、悉く擧けて漏らす所なし。

◎國民新聞の紙面（利益と快樂と併せ兼ぬ）

重大なる問題に際しては、滔々汨々數千言の大論文を草す。日々の問題に關しては、三四乃至五六の小品論評あり。政治上の主流、大勢を揣摩するには、精嚴奇警なる雜報あり。海外時事。文學時事。社會問題。演說筆記。行樂案內。演劇批評。新刊書批評。時事短評。流行案內。經濟事情。その他通信は朝鮮琉球より內地の各所に及び。之に加ふるに雄奇精妙なる挿畫あり。更らに日曜附錄あり、社員諸氏獨力結構の文學的、社會的文學を掲載す。一たひ之を手にすれは、再た措く能はさらしむ。變化あり波瀾あり、人をして快樂と利益と併せ兼ねしむ。

定價

		地方郵稅
一枚	一錢五厘	五厘
一ヶ月	三十五錢	十三錢
三ヶ月	壹圓	三十九錢
六ヶ月	壹圓九十五錢	七十八錢
一ヶ年	三圓九十錢	一圓五十六錢

廣告料

一行の代價は左の如し 但五號活字二十二字詰

一回	十三錢
二回以上	十二錢
五回以上	十錢

發行所 東京市日吉町 國民新聞社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

平民叢書第一卷 **十九世紀之大勢** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第二卷 **世界經濟上之變動** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第三卷 **國家と政府** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第四卷 **教育と遺傳** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第五卷 **文明之弊及其救治** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第六卷 **現時之社會主義** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第七卷 **經濟と道德** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第八卷 **歴史攻究法** 定價拾貳錢 郵税貳錢

平民叢書第九卷 **哲學變遷史** 定價拾貳錢 郵税貳鉋

平民叢書號外 **銀貨之過去現在未來** 定價拾錢 郵税貳錢

平民叢書號外 **責任內閣** 定價拾錢 郵税貳錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

十二文豪第一卷 **カーライル** 平田久著 定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第二卷 **マコウレー** 竹越與三郎著 定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第三卷 **荻生徂徠** 山路彌吉著 定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第四卷 **ヲルヅヲルス** 宮崎八百吉著 定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第五卷 **ゲーテ** 高木伊作著 定價拾八錢 郵税四錢

十二文豪第六卷 **エマルソン** 北村門太郎著 定價拾八錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價
一冊 金五錢 郵税 金五厘
半年（十二冊）前金五十錢 地方 金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓 共税 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰）一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番
發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治二十七年五月十日發行

家庭雜誌第貳拾九號

目錄



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社説

書物の外にも學問あり

學問とて六ヶ敷書物を讀み、六ヶ敷字を識り、六ヶ敷理窟を云ふとのみに限らず。總て智惠を殖し、徳を磨き、身を潔ふし、品を高ふし、立派なる人間となるは、學問の道と知る可し。故に何人にても學問に心懸けねばならぬなり。吾は多忙なり、故に學問する能はず、吾は子供の世話せねばならぬ故に學問する能はず、吾は家事向の仕事多き故に學問する能はず、吾は書物を讀まぬ故に學問する能はず抔と申すは、大なる僻事なり。大なる心得違ひなり。それ學問とは、人間となるの道なり、如何に用事あれとて、人間として人間たるの道を學ばざるとやある。

凡そ目より入り耳より來るもの、何物か學問の材料たらざる可き。世界は大學校なりとは、洵に此上なき名言にあらずや。若しその心懸けあらば、下女の言葉にても、車夫の話しにても、小兒の無邪氣に爲す事にても、皆な我が學問の材料とはなるなり。諺に背負ふた子に敎られて川を渡るてふとあり、此れも聞く人の心得次第によるなり。

されば學問の工夫は注意が第一なり、平たく云へば、心懸けの善きとなり。病人に接しては、看護の法を學び。小兒に接しては、育兒の法を學び。家に於ては、家事經濟を學び。臺所に於ては、料理法を學び。衣服を縫ふては、裁縫を學び。客に接しては、交際を學ぶ。下女下男を使ふては、人情を學び。その他日々の出來事、皆な學問とならざるはなし。

學問の心懸けに大切なる第二は、謙遜てふことなり。己れ心高ぶりて、何事も物の數とも思はぬ人は、如何程結搆なる話しを聞きても、耳には入らぬなり。如何程立派なる行ひを見ても、目には映らぬなり。謙遜なる人には、世界は大なる敎場にして、世人は大なる敎師なれども、高慢なる人には、世界は何の意味もなき沙漠にして、世人は何の譯もなき骸骨のみ。されば自から誰に對しても弟子と心得、汲々として、人の敎を聞き、己の智惠を增し德を磨く覺悟をなし、以て世に立ち、世を渡る樣ありたきものなり。

第三には眞實てふことなり、何事も浮きたることにては、學問となる能はず。兎角世の中を胡魔化して通る人には、世界は夢にして彼自身も亦た夢の一部なり。夢の中に夢を見て、焉んぞ學問の道に進むを得んや。』何事も等閑にせず、大切に心得。人に接し、世に處するも、心の底より眞實を以てすれば、自然己れが學問の助けとはなるなり。

第四は觀察てふヿなり。觀察とは何事によらず、己れが周圍のものを、氣を附け、心を附けて、見聞し、それ〳〵之を心に留め置くヿなり。所謂る見る目嗅ぐ鼻とは此の事なり。別けて家庭の主宰たる婦人は、觀察の領分狹ければ、せめてその領分内のヿは、觀察の功夫專一にありたし。又た成る可く觀察の領分を擴ぐる心得も、恒に忘れぬ樣ありたし。

若し觀察の功夫あらば、我が家に出入する客の人品談話に就てすら、淺からぬ學問の材料は得らる可し。一寸買物に出懸けてすら、若しくは街頭を通行してすら、學問の材料となるものは幾何もある可し。

最後には(第五)思慮別分するヿなり。觀察したるのみにては、未だ飽き足らぬなり、其上は篤と熟考するヿなり。隅の隅迄、奧の奧迄、見つめ、聞きつめ。枝を見れば幹に及び、幹を見れば根に及び。思へつめ、考へ

つめ、能く〳〵我が心に合點の行く樣研究するが、學に進む、緊要の功夫ならむ。

論　説

事業の豫算

自助生

來年の事を云へば鬼が笑ふとは、命運の限りあることとを忘れて貪婪なる希望を抱くを誡めし警語なれども、亦一年の計は元日に在りと云へる名言の成立を妨ぐるものにはあらざるなり。

羅針盤のなき舟は達する所なきが如く、設計なきの事業は成就することあらず。經濟上に於て、一國にも一家にも一年の豫算あり一月の豫算あると共に、一人の上に於ける事業の行程にも同じく一生の豫算一年の豫算一月一日の豫算ありて着々之を爲し去るにあらざれば不可なり。

品物貨財の失ひはたとひ千金萬金の多きも再び之を得るの期あるべし。時間の失ひは一日も再び晨なり難し。少年易老の歎、日暮路遠の嗟、必せずば踵を旋らさゞるに到らんとするにあらずや。

故に最も善く時間を用ひて、人の力に適應すべく割り與へられたる人生百年の歲月中に於て、人の當然に爲し去るべき事業を成さんとならば、先つ其終天の事業を豫定し、自家は竟に是れ何を以て一生の紀念として人界に留むべきかを擇び、其目的に行くの道途の如何にすべきやを豫算しおき、其手段順序歲月の短長小大によりて、今年は何々を成すべく、今月は何々を成すべしと定め、更に切に今日は何を爲すべきかを豫算するを要す。

今人ありて漫然として起きて出て、朝食をすまし、さて今日は何をなすべきやなど思ふ如き事あらん乎、彼

を爲さん此を始めんと思案するうちにはや九時十時となり、遂に其日は何事も爲さで終るに至るべし。若し之を前夜に於て、少なくも其起き出る前に於て豫定しおき、起き出るや直に其順序によりて决行し去りたらば、其日の課業は其日に於て之れを成すに餘りあるあり。

斯くして日に其豫定の事を卒へ、月に年に其豫定の事を卒へ將ち行かば、其志す所をなすに於て亦何の難きことかあらん。よしや意外の障碍ありて爲に其希望に到達せずに斃るゝことありとも、以て其天職を曠ふせざりし人たるを失はざるべし。

事前に定まれば蹶かずといへり。心志あれば必ず便宜ありといへり。

史談

歐洲諸國王家の片影（五）

七、英國

五十七年前十八歳にして日輪嘗て沒せざる大帝國の女皇となられしヴィクトリア陛下は、本月廿四日を以て七十五回の誕辰を迎へらる可し。

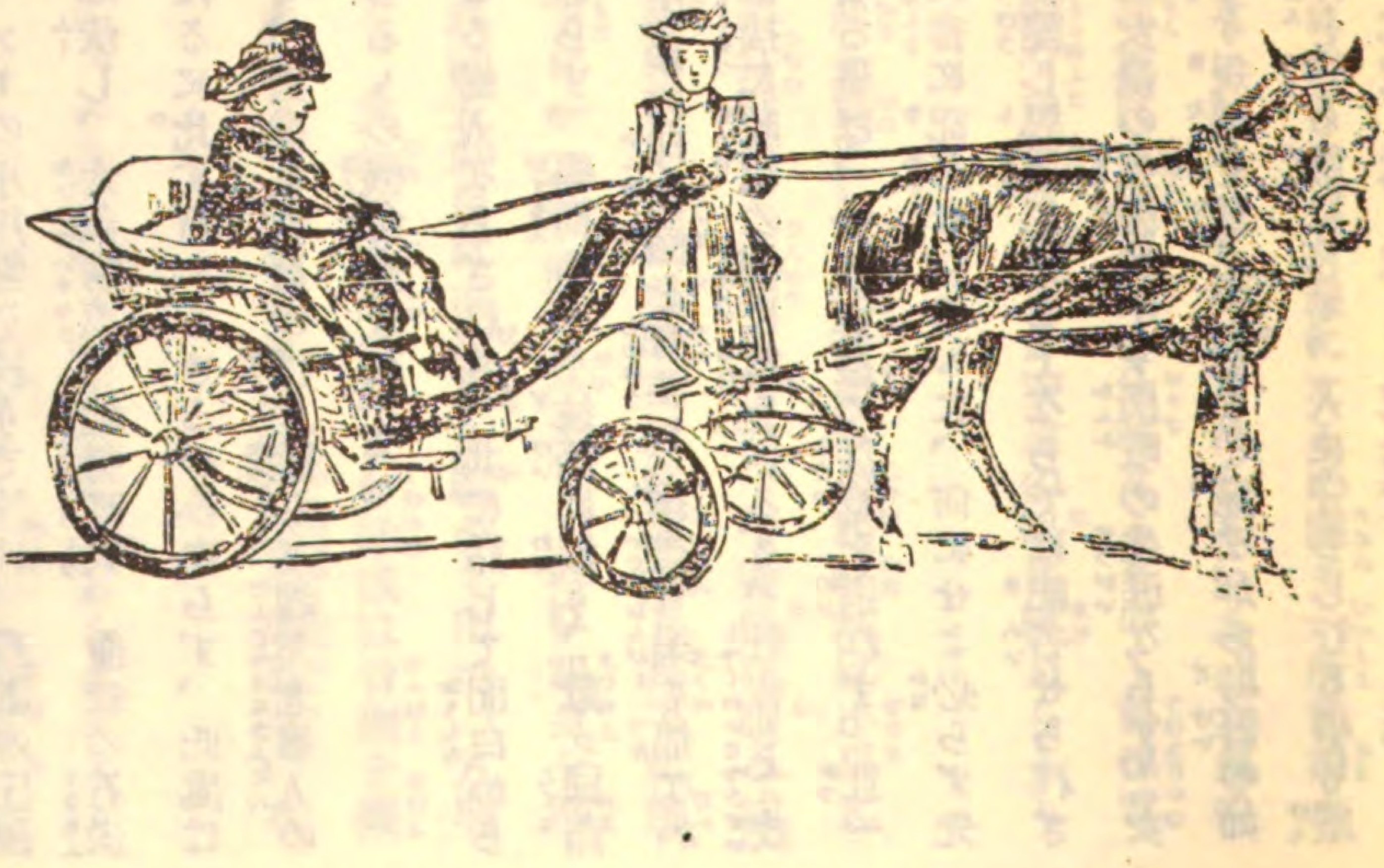
英國女皇が五十七年間民具瞻の位置に立ちて、年は一年より愈人民の愛敬を受け、歐洲諸國王家の中尤も人民と仲好き君主と云へば誰も皆英女皇を想起するに到りしは、色々仔細もある可けれど、婦人としての女皇の眞價値誠に以て摸範となすに足るものあればなる可し。良き婦人たらずして良き女皇たる者なく、良き女皇にして人民の敬愛を得ざる者なしとは、英國女皇に於て其適例を見る可し。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吾人は曾て本誌發行の初に於て「老女皇」と題し、英女皇の略歴を叙せり。今者女皇現時の生活及英國皇室の有様に付て、單簡に覗ふ所あらむ。

* * * * * * *

「吾身は女皇にしてはやゝ丈矮し」とは、即位の頃女皇自から評されし言葉なりとかや。げにも女皇は身の丈四呎十一吋に過ぎず、近來殊に肥滿せられたるを以て、其姿は往々にして農家の老婆と見誤まることもある可じ。併し女皇の威儀は儼然其一擧一動に印せられ、盛なる儀式の場などに臨まるゝ時は、げにも世界一の大帝國の女皇は斯くこそあらめと思はるゝ程の威光を備へらる。數年前女皇は位を皇太子ウエールス親王に傳へらる可しとの風聞頻りなりしが、女皇は實際中々位を下らるゝ意なく、年こそ寄りたれ、足痛こそ時に發すれ、身躰壯健にして精神活潑におはせば、第二十世紀の英國史は猶ヴィクトリア女皇の名を以て始



められんこと、殆んど疑を容れず。是れ英國人の皆深く祈る處なり。蓋し皇壻故アルベルト親王の才とヴイクトリア女皇の德とは不思議にも皆皇女達に傳はりて、皇子達は遙かに皇女に劣り、就中皇太子エールルス親王の如きは、頭已に頒白となり孫持つ身にてありながら、女優を寵し、賭博を好み、負債を仕出して老女皇に一ト方ならぬ心配を掛けらるゝ樣なる次第にて、皇太子位に上らるゝの日は英國皇室の威光墮つ可しとは、一般識者の夙に憂ふる所なればなり。

英國女皇は三處の宮城を有せらる。ウインゾオル宮、オスボルン宮、蘇國のバルモラル宮。バッキンガム宮の如きは一年に一週間も滯在あること稀なり。ウインゾオル宮は歐洲諸國第一の宏莊なる宮城なるも、女皇はあまり倫敦を好まず、寧ろ他の二宮を愛し、冬はオスボルンに夏はバルモラル宮に送らるゝが常なり。殊にバルモラル宮は其愛せらるゝ所にて、此處は倫敦を距る五百哩、デーの小川宮を繞りて流れ、蘇國の丘陵宮を繞りて起伏し、大氣清涼、地勢高爽、倫敦の石炭煙に包まれたるに比す可からざるのみならず、此處は人目少ふして、女皇も女皇の役を脫して尋常老婦人の眞躰に復へらるゝの機會多きなり。

女皇は華手なる婦人ならざれ共、共に話して面白からぬ婦人にはあらず。學問あり、技藝に涉り、數ケ國語を使用し、近頃は亦印度語を修業し、繪畫音樂も拙なからず。また直接に政治の衝に當らざるも、社會上政治上の重要なる事は、一も女皇の注意を逃れず。且一年數千通の文書に記名せらるゝに、何にせよ必らず先づ其事柄に通曉し思慮したる上ならでは記名せられざるを以て、老女皇の生涯は中々閑暇の生涯ならず。女皇は時間を守り規則を重んずること宛ながら時計の如く、自ら職分を守る嚴にして、人に守らしむる事も嚴なり。女皇亦一盞の茶を喫して世間咄をなすを好み、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

常にペルモラル若くはオスボルン宮に婦人客を招き或は宮女に對して物語らるゝに、彼等は皆女皇の世間の事に明るきを驚くとぞ。

孤立獨處は金冠の價とも云ふ可きものにて、別けて老女皇の如きは、其女皇たる威嚴を保つが爲めに自づから身邊の者との間に隔てを置かざるを得ざるを苦まるゝなる可し。殊に七十幾年世に住み來つて滿頭の白髮雪の如く、昔の友は大率逝き、皇婿には夙に死別れ、忠實なる老臣は概ね先きだちて死し、今は即位の當時喝采歡呼したる臣民も多くは去て殘らざるの今日、女皇は如何に物淋しく思はる可きぞ。此程女皇は英國の名士某の寡婦に書を寄せて曰はるゝ樣、「良人の死亡は婦人の身に取りて最大の不幸なり」と。

三十年來女皇は劇塲オペラに行かれしことなきも、俳優樂人は往々女皇の前に在て其技を演ぜり。女皇尤も小兒を愛せらる、如何なる老嫗か小兒を愛せざらん。女皇の幼なきや、常に人形を戒めて「オトなしくしないと卿を女皇にするよ、女皇になると誰も一所に遊んで呉れる者もないから」と獨語されしといふ。女皇の腕環には、曾孫或は玄孫の尤も幼稚なるものゝ畵像常に嵌められ、朝夕慈愛に滿てる女皇の眼に眺めらるゝなり。

女皇は平生早起を旨とし、朝餐濟み公務終れば小馬に引かせし馬車に打乘つて運動に出で、午餐後は讀み或は書き、時節夏にして天氣美晴なれば愛犬を足下に侍らせて天幕の下に一二時間を費やし、或は謁見を賜ひ、天氣好ければ五時には亦馬車を驅つて出で、八時半に晩餐して、其後は客室に於て會話或は音樂を樂み、然る後寢に入る。女皇一日の生涯略如斯きものなり。

或人記して曰く、十餘年前、休暇にて久しくウァイトの島に滯留せし頃、余は常に肥滿せる丈矮き眞面目な

る老媼の黒服着たるが、無蓋馬車に打乘つて田舍道を驅來るを見たり。是れヴイクトリア女皇なりき。女皇は常にビアトリス皇女を伴なひ、車の後にはジヨンブラオン常に侍せり。余は御者が道旁の一茅舍の前に車を止め、女皇皇女の車を下りて何か慈善の働きせらるゝを見たり。此茅舍は女皇の多年識られたる老園丁の寡婦の家にて、寡婦まさに世を去らむとしつゝありしなり。また此島の僧某余に告げて云ふ樣、曾て去る茅舍に老病者を見舞ひしに、病床の側に質素なる喪服着たる老淑女の聖經を朗讀しつゝありければ、余は退り出でむとせしに、女皇陛下―此質素なる喪服の老淑女は實に女皇陛下に外ならざりき―は余を呼び止めて「卿幸に留まられよ、牧師の慰藉は病人を奪ふは余が欲せざる所なり」と宣ひしと。斯る女皇の深切は、珍らしからぬ事なり」云々。

女皇尤も威儀を重んじ、禮式の一點一畫も遂げ盡さずしては安んぜられざるも、其天性の質朴にして人近きは、人の能く知る所なり。皇婿在世の日は、共に伯爵夫人の名を以て蘇格蘭地方を旅行し、田舍旅館に宿り、田舍人と打混ずるを喜ばれ、往々皇女達と田舍百姓の家に行きて小兒の命名式に列なり、亦名親となられしことあるは、其記錄に明らかなり。抑も亦宮中の謁見式には、謁見終つて退く者は皆後ろざまに歩みて低頭しつゝ退くの定めにて、婦人抔は殊に之を苦むことなるが、女皇は斯る時には殊更に眼を他處に注ぎて其人をして女皇の眼前に見苦しき態をなすの苦を免れしめらるゝ事の如き、極めて些細なる事の樣なれ共、女皇の如何に思慮あつて人の上を思ひ遣らるゝかを見るに足れり。

女皇已に五十幾年の在位によつて、自然に其位置に添ふの威嚴と落つきを備へられ、殊に議會開會若くは他の公式に於て勅語の朗讀ある時は音聲尤も微妙にし

て、英女皇の勅語朗讀と云へば名高きものなるも、女皇は今日に到つて猶公衆の前に口開くを安からず思はれ、近年は概ね代理に一任せらるゝなり。女皇また宗敎上の務を怠らず、秋の頃はバルモラル宮邊の小さき田舍寺院に行きて、田婦農爺野孃村兒の間に打まぢりて晩餐式に列せらる。女皇曾て言はれけるは、余は常に蘇格蘭人と話すを好む、彼等は實に質朴率直不羈の民にて、君主が之に近くも彼等は些も恐るゝ事なく、しかも其擧動正直にして亦禮あり」と。亦寺院の集會に就きて記されけるは、式は誠に熱心にて、全會衆の熱信言語に絶へたり、質素なる衣服つけし此渾ての善良なる羣を見れば誠に感に堪へざるものあり、余は彼等の多くを知る、彼等の或者は年老いながら深雪の中をはる〲徒歩して來りしなり」と。

人の上に立つ者の尤も必要なる一資格は、記憶なり。一片の名、半面の識、之を記憶することの往々如何に大なる關係を及ぼすよ。ヴイクトリア女皇の如きは、グラツドストーン氏が畢生の功業をも能く記憶せらるれば、蘇國の田舍のむくつけき田舍男が女皇の馬に一桶の水振舞ひたることをも記憶せられ、一たび相見たるのみなる人の名も顏も能く記憶して、クリスマスや新年や子供の誕生や何かの週年や思いかけなく女皇の賜物を得て驚く者も稀ならざるなり。女皇の僕婢侍女侍從等が概ね一生務め死するの事實は、偶ま以て女皇が如何によく人の心を得らるゝかを知るべく、其家に見て亦國に於ける關係を推測するにあまりあらむ。

女皇もと九人の皇子皇女あり。今殘らるゝ者七人。皇子には多望の人少なきも、皇女は何れも遙かに飛びぬけたる方々なり。一點の暗き所なき七十五年の生涯を送り來つて、皇子皇女婿嫁あまたの孫あまたの曾孫あまたの玄孫に取りまかれ、忠實なる臣民に取まかれ、身心壯健にして位に坐せらる、英國女皇の如きは、誠

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に妬む可く稱す可く亦愛す可き婦人なるかな。

科學

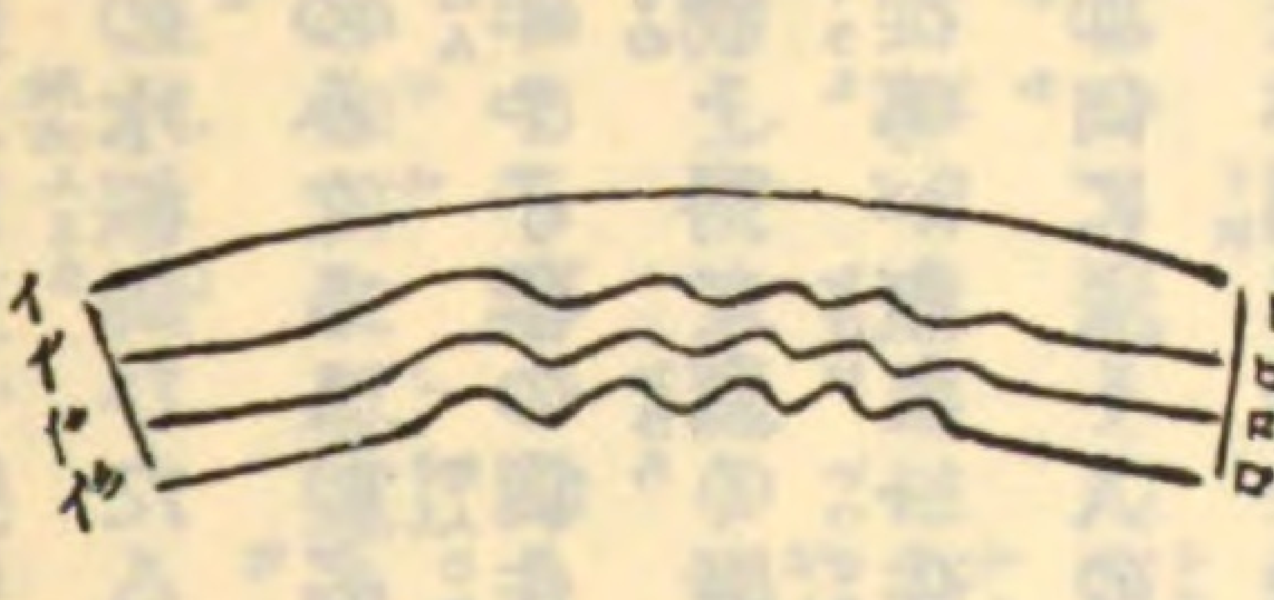
山

山は喜びと、幸福と、健康の原なりと云へるが、實に如何程疲れたる精神、心配ある人、氣拯のしたる人にても、一度山に登る時は、健康は回復し、氣力は回復し、精神は活潑となるべし。

かゝる秘密の力ある山は如何にして出來たるやと云ふに、地質學は明瞭にその原因を説明せり。噴火山が地中より噴き出でし事は、元より覆ふべからざる議論なれども、通常の山脈も、地中より噴き、出でしものゝ如く論じ來りしは、誤りにして、今日は全く反對の學説起りて、通常の山脈は、地の一部の沈みしがために高くなりしと云ふに至れり。卒然之れを聞く時は、奇怪なる語の如くなれども、靜かに考ふる時は、實に眞理の含まれたるを見る。今林檎を寒中に貯へんに、皮の表面は老人の顏の如き、皺を生ぜん。地球も之れと仝じ理にして、漸次に冷へ縮みつゝある地面は、止を得ずして皺を生ずるに至れり皺は即ち山なり。

今圖を以て之を示めさんに初め地球の未た冷へざる前に、地面が假りにイロの如く眞つすぐなりしとせんに、少しく冷へし時は、イロの如く少しく皺を生じ、漸々冷ゆるの度の增すに隨つて、イロ次はイロの如く、漸んく〵にその皺の高低甚だしくなりしなり。道理はさてをき、實事の上よりも云ふに、現在の地球は最早熱度の上に甚だしき變化なきが故に、目に見るべき著しき變化はあらざれども、いつ迄もイとロその儘にては

第一圖



居られまじければ、地の中の最も窪み易くして茶るべく抵抗のなき所を擇らみて、少しづゝ沈みつゝあるなるべし。時に由りて地層は第二圖の如く、全く變亂せるとあり。又た時には數里の間、少しも規則に合はざる沈み方を爲せるとあり。

されども地皮の收縮して皺の生ぜんと欲し、運動を始しめし時、皺の廣さ(即ち二圖の(イ)と(ロ)との間)餘りに廣ろ過ぐる時はその頂上(ハ)の如く平面となり尚ほ收縮して止まざれば遂に(ニ)の如く頂上に低き所を生ず。我等は富士山に付きて、その說明を爲し得べし。富士の頂山には噴火口の外に、一層廣き穴あり。之れはその頂上が周圍の引力のために引き付けられて、平面となり。遂に低き所を生せしものなり、地球は尚ほ今日も收縮して止まず。地皮は下に下がらんとして止まざるが故に、若し富士山の中層の地盤の抵抗力が引力に負るに至れば、今日の富士山は、頂上の所更らに低く落ち、遂には二個の山となるやも計られず。假りに第二圖の(二)の所を、富士の頂上と定むれば、(二)の所は更らに落ちる、(ホ)と(ヘ)の所が一個の山となりて、同圖の(ト)と(チ)の如き二山を生ずべし。

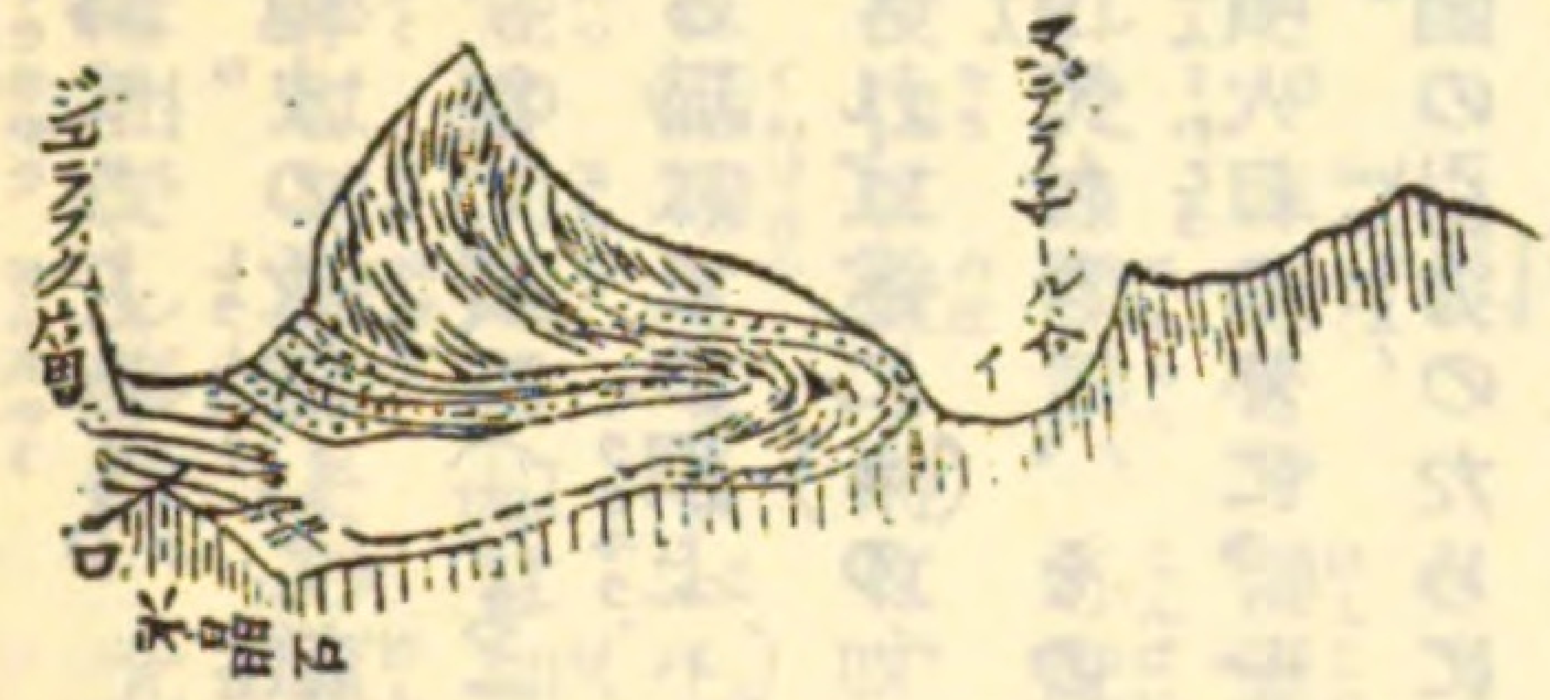
第二圖



第三圖は世界の中にて、最も地層の轉倒せりと聞こへたるアルプス山の地層を示せるものにして、圖中(イ)の所はマザラチール谷と稱して、昔時は(ロ)の處の如く、その上はヂュラシック層を以て覆われしが、今は上の層なくなりとて次ぎの層なる水晶石全く顯われたり。ヂュラシック層と云へば、中々薄からざる層なるに、如此全く去りたりと云へば、その層は何處へ行

きしやと云ふに、地球の表面は絶へず變化しつゝあるものにして、或る處は今日も尚ほ漸々と上り、或る處は沈みつゝあるが故に、その變化の際、中なる水晶石の出でしなるべし。彼の有名なるアンデス山は、今日も尚ほ上りつゝある山の一例なり。カムベル教授の學説に由るに、地球は元とドロ〳〵としたる液躰なりしかば、その頃は山もなく、陸もなくして、全地全面皆海なりしが、糊の上に皮の生ずるが如く、若しくは厚紙の上がぴり〳〵と縮まるゝが如く、地熱の減すると共に、所々に高低ある皮、即ち陸地山を作りしが、其間も地球は絶へず回轉するが故に、地球表面の中にて、最も遠心力の强よき所は、山丘高く、求心力の强き處は、之に反對の結果を顯わせり。アルプス山脈の高かきは、これ遠心力の衝に當るが故なりと。

第三圖



地球上に土地と山との出來るには、一度一度各々期ありて、或は水晶の多き山の出來し時代、砂礫の多き山の出來し時代等、種々あるが、我國にては第二世紀の終りに至りて、全國中大噴火ありて、燒石所々に噴出し、中國の西部の如きは、最も甚だしくして、地層中最下等にある花崗石、多く噴出せり。今日に至る迄、中國に花崗石の多きは是れがためなり。

地球が常に變化せる證據として、最も著しきものは、スカンデチビヤの北方の漸く高くなり、その南方の漸く低くなり、南部アメリカの西部は上り、東部は低くなりつゝあるを見ても知るべし。

山てふものゝ一と度生ぜしより、地上にある凡べての

者は之と戰を始じめたり。太陽は森林と、熱は寒冷と、空氣は氷雪と、凡ての植物は虫獸人類とに對して爭そふに至りき。其爭ひの樣は、譬へば秋の降雨が、凡ての穴と、凡べての割け目に潜入して、冬日に至り、岩をも山をも固ためん力にて、凡てのものを堅くしばり、居る時に、春の太陽は雜作もなく之を溶かし盡くすが如し。

かくの如き順序、かくの如き爭鬪を經て作られたる、山はその上に、森林と云ふ面白きものを作りたり。森林に付きては、又た面白き話しあり。

森林

種々なる木が不親切なる岩の上に根を下だし、窪みたる穴に潜みて、山をろしの劇き風を避けながら、上には僅かなる太陽の光線を逃がさじと延び上り、下には細そき裂け目より下りて、清水を飲まんとす、その骨折りは中々に想像すべくもあらず。

尙ほ面白きは寄生木なり、之れには中々奇妙なるものあり。通常の寄木さへ面白きも、此頃英國の林の中にて發見せられたる一種の菌の如きは、實に奇中の奇と云ふべし。そは或る人、林の中にて、一の木の根先きが、その近くに生へたる、緻密に織りたるが如き菌の中に蟠まりたるを見ければ、こは多分、木の根が成長する道すがら、邪魔になりし故、菌を通してかくなりしものならんと思ひ居りしに、豈に計らんや、この菌は一種の寄生植物にして、かくなせるは木のためにも、利益あると共に、菌のためにも亦大なる益ありて、存ぜるなりき。この菌、土中より己が滋養になるものを、精々と集むれば、待ち受けたる木の根は、之を己が幹を通して葉の所迄吸ひ上て、樹汁に製造す。その手間賃として、樹汁の多分は、その木の養物となして用ゆれども、その一分は、資本家なる菌に返納し、菌は之がために生育しつゝある也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

熱國の森の様は、實に我國の如き、温帶地方にて想像も出來ざる程なり。我が國にては森と云へば、松や杉の如き、一本立の木の間に、樫や、楢や、其他の木の何れも一本立のものが集りて出來たれども、熱帶地方にては、之に反し、此木の枝は、彼の木に纒れ、彼の木の枝は、此木に雜りて、木と云ふ木は、大てい青き細き木に纒われ、或は蛇の如く、或は螺旋の如く、網の如く、塊の如く、織り合ひ、縫ひ合ひたれば、如何に慥しかなる瞳を凝すも、何れの木に何れの花咲き、何れの果のなり、何れの葉の生せるや、見別くるとは難たし。特に棕櫚に似たる、丈の高き幹の、直ぐき木が、一定の高さに打ちそろひて、各々葉と葉とを接へたれば、一點の雲なき青天の、しかも大陽の中天に昇れる時と雖も、森の中は暗夜の如く、會ま〱僅かの光の見ゆるも、恰も魔物の光の如く、薄氣味悪るきと云わん方なし。

森と一國の盛衰

森と一國の盛衰は實に著るしき關係を有す。今日荒れ野と呼べるシリヤ、中部アジヤ、パンスチン、及び北部アフリカは一度『乳と蜜の流れあり』と云はれし豊かなる一國なりき。此の外幾個の國は山林を不注意に用ひしによりて地上より去りたるや數ふべからず。何が故に、一國はかく山林と生命を共にするや、何故に多くの國は、灰と塵に歸せしやと云ふに、大に原因あり。

山林は一國の生命に、最も大切なる雨水を貯ふ。雨の天より下るや、木の根と落葉は、之を含み保もちて、一時に流れ去らしめず。たとひ天より降らざるも、根は下より水氣を呼び上ぐるの力あり。その貯へられたる水は、谷川となり、小川となりて、田畑を灌漑す。山林はたゞに田畑を灌漑すべき水を貯ふるのみならず。山林なければ大洪水あり。何となれば上より降り

たる雨が、溜る所なくして一時に流れ出づるが故に、近邊の土地は、雨の全量を一時に荷ふべき不運に遇ふべければ也。また山なくば薪炭に窮するのみならで。製造工業は漸次に衰ふべし。空氣は乾燥して、肺病の如き病氣は、益々甚だしくならん。木を伐る職業、炭を燒く職業、獵師、製造業、工業の發達なきが故、一國の富の集まるべき法方なし。田畑は荒れ、病人は殖へ、富は入らず、水害は多く、何一つとして盛になるべき法方なし。勢ひ衰へざらんと欲するも得べからざるにあらずや。

是れ現に今日實見する處なり。彼の佛國の一部分なるホーテー及びバセーアルプスの如きは森林を伐ると共に、人民はだん〳〵減少せり。葡萄園は洗ふが如く去れり。市は細まれり。今にして法方を施すにあらざれば、遠からずして人跡絶ゆるの不幸を見んと云ふ。之に反して、佛國のランテスと云ふ所は、非常の繁盛となれり。此處僅か五十年前迄は、一の貧しき不幸なる、見すぼらしき町に過ぎざりしが、松を植ゆるとを勵げみし以來、僅かに非常の繁盛を來たし、今や少なくとも、十億萬フランク以上の財貨を益し、五十年前迄は、僅かに貧づしき羊飼が、牧場に出でて、不健康なる生涯を送るに過ぎざりしが、今や至る處に水車仕掛の鋸所あり。石炭の倉あり、トルペンチンの油にて爲す事業等、中々盛かんにして、振るへる計りに貧寒なりし町、今や富饒なる市とはなれり。

玆に森林の木の込み入りたる搆造を、一々に記載するとは難たかるべし。然れど、今一本の木を横に斷る時は、所謂木目なる者の中には、外皮、內皮、髓、纖緯、細胞、空氣の袋等ある事は記臆すべき事なり。今一葉の木の葉を取らんに、誰れも之を呼びて、一言に木の葉と云へども、實はその中に數へて盡くせざる程の細管と、無數の細胞と、纖緯とが、込み入りたる仕組に

なり居るから。先づ葉の最も上にある者は細毛なり。此毛は葉の最も上にある、平たき細管に生へたるが、葉が未だ幼稚なる時は、柔かく、長く、數も多けれども、生長するに随たがひ、漸々と抜け落つ。その管の下に又た一層の管あり。之れは太陽の光線が、葉の中に入り來りし時、之を整理するの役目を持てるが、その下に又た數層の丸き管あり、之れは空氣の流通へ備へらる。其他木纖緯もあり。氣孔もあり。木葉を青色ならしむる分子もあり。管と云へば一言なれども、その管にも又た膜もあれば、液もあり、細胞もあるなり、かく一言に云へば簡短なるに似たれども、倘ほその氣孔は、一葉の中に少なくとも十萬はあり。熱帶地方にありては、凡べて樹木の氣孔少しく窪ぼみて、その周圍に細毛ありて、植物の乾燥に過ざる樣に保護せり。

又たとひ、同じ一本の木の中にても、葉の位地に由りて、葉に異狀を呈する事あり。

細密なるに至りては、此の如しと雖も、大なる事を言へば又た一驚を喫する事あり。一の大なる藻草（マクロシスチス）は高さ千呎の長に達せり。

ウエリントニヤと云ふ木は、四百五十呎あり、淡黄ゴムの木は四百八十呎も高あり。

餘り小説らしく想像らしけれどもアゼンスのシチルペにある橄欖の木とブリチー氏の記るせる槲は地理創造の始めよりある木なりと云ひ傳ふ。ローマの開祖ロミユーラスとその兄弟とを木の下にて狼が養なひしと傳へたるその木は、未だに之れあり。ランバルデーにあるソマシプレスと云ふ木はキリスト降生の時より四十年前に高さ百二十呎周圍二十三呎ありてフランシス一世がパヴユヤの戰爭に失望してその刀をつき立てし跡ありと云ふ。いかに驚くべき歴史にあらずや。

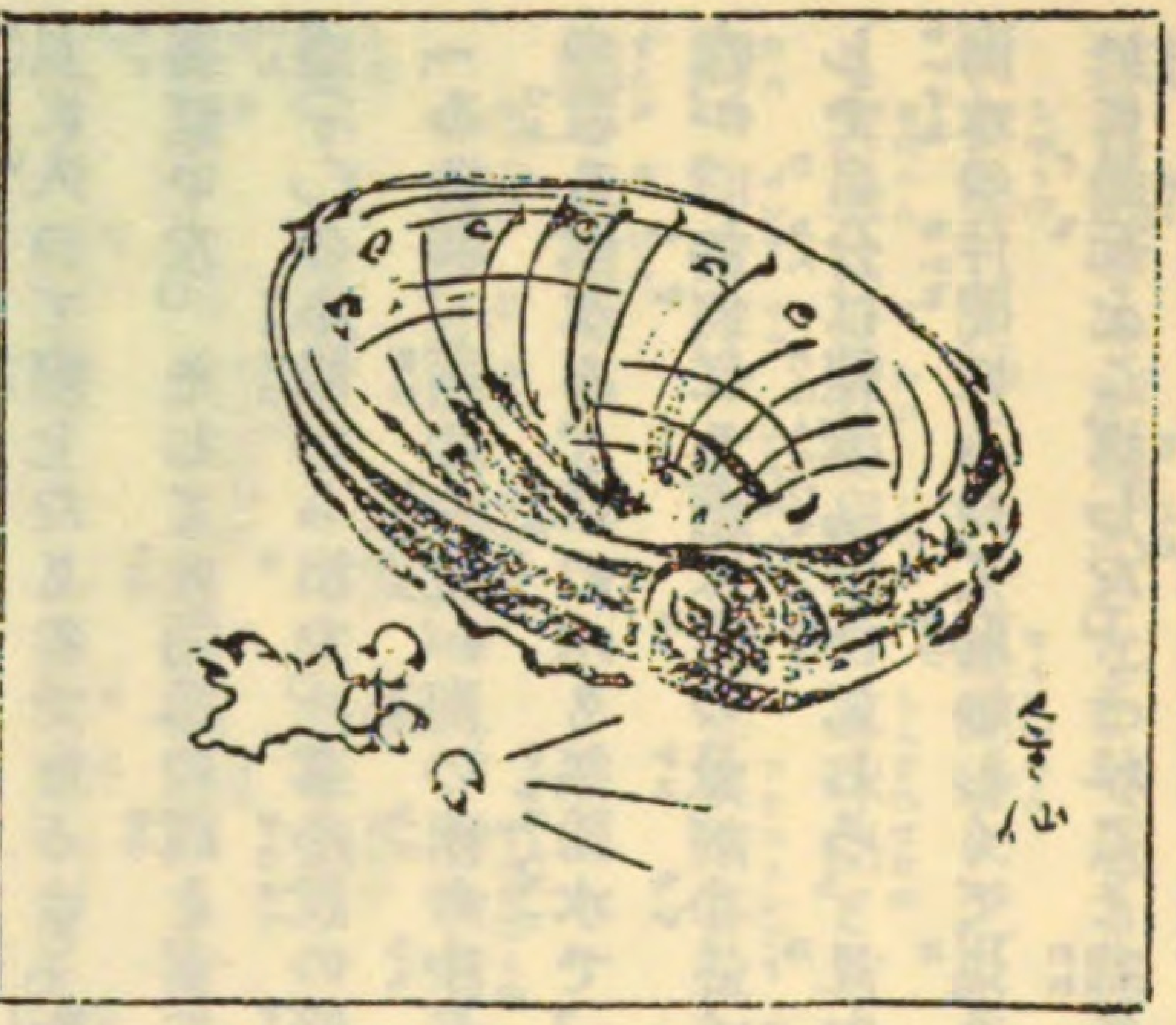
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寶玉雜話

美尖

眞珠

すべての寶玉類、皆工人の切瑳琢磨に因つて始めて其天然の麗はしい光輝を放ち、或ひは連城と爲り、夜光と爲る中で、唯ひとり眞珠のみは自然に、美麗な光彩を備へ、自然に完全の形ちを爲し、苟しくも工人の手を加へるべき餘地を許さず、更に彫琢を施すべき所も無く、自然に生まれて又只自然に用ゐられる。實以て玉の中の玉、眞實の珠であるとの意から支那で早く之



に眞珠の名を當てた。

其形ちと言ひ、色と言ひ、誰が見ても清淨潔白純粹である所、又前述のとほり自然に完全である所、凡そ是等の原因から古來眞珠を何れの國でも珍重した。

どらいでんは之れを稱して「天然の作の最純の物(Ocean's gem the purest of nature's work)」と言ひ、むうあ亦之を稱へて「雨滴海に入つて眞珠と爲る (As the rain from the sky which turns into pearl as it falls in the sea)」と謠つたなど、既に西洋にも大いに之を珍重した。支那でも古來之を貴重する餘り、終には工夫して藥劑にも用ゐ「魂を安め、魄を定め、目を明きらかにして、聾を治す」能が有るとさへ言つた。

其質を言へば、鮑、あちや貝等の分泌する液が海水中の石灰質などと化合して終に之を成すのに過ぎぬものと言ふ。扨も驚くべきは自然の技術！

西洋でもむかしは此珠に對しては種種の誤說も有つ

た。其一は曰ふ、眞珠は天女の涙の滴りが牡蠣に制め取られたるのである」と。其二は曰ふ、純潔な雨の粒が貝に入つて變じたものである」と。むうあの詩は此説に基づいた。そして此第二の説を實に土耳古、亞剌比亞邊(?)の小説から出た。其小説の筋は斯う。

「ある時、雨の一粒が海の水の中に落ち加はつた。雨の粒も水なら、海の水も無論水で、其段は同じであつたが、如何にも雨は身の量が小さくて肩身が狭い。よしや自分は純潔清淨にしろ、見わたしもならぬ程の海水の仲間に入つて恥かしくて堪まらぬ所から獨り大いに愚痴をこぼした。それこそ我と我身をはかなむ、それを見て流石に貝が憐れを催し、口を開いて其雨の粒をわが胸の中に掻き抱き、養ひ育てた功が空しからず、遂に美麗な珠と變はつた、それが即ち眞珠である」と。

是等は眞珠を鍾愛する餘りに附會した古代の小説に過ぎぬ。要するに眞珠も其發生の次第を言へばさして貴くも思はれぬが、唯其外觀の如何にも美麗なので今日でも寶玉界に上位を占める。眞珠の粒の中央には必ず砂とか石の片とかの眞が有り、それを土臺として次第に年を經て圓い貝殼の層が成つたもので、是が爲には隨分をかしな話しも有る。

凡て千圓ばかりの價だけの大きさの眞珠を含んだ貝が其道の商賣人の手に渡つた事が有つた。何れも其大粒なのには驚き、是ならば折角の美玉、貝から取り外したならば一層の高價を爲すであらうと信じ、苦心して取り外して見れば、思ひ掛らぬ、圓球の眞珠で無く、底に腐つた樫の木の片が有つたといふ。

とは言へ、古來各國人に此珠の貴重されたのは殆ど一般で、波斯人などは黄金よりも貴び、埃及人なども神像をば是で飾つた。羅馬人は是を以て美麗、純潔、高尚の符號とし、婚姻の必要品としたくらゐで、之を

貴ぶ極は彼の豪傑しいざるさへ布告を發して庶人及び未婚婦人に此珠の使用を禁じたほどで、素よりしいざるの工夫是で多數の結婚を促がした次第で、此一事でも如何に羅馬の社會が眞珠などの寶玉に心を奪はれて居たかは知れる。今も印度では婚姻に際し、眞珠を花嫁に餽るのが儀式となつて居る程で、古代は實に盛んに賞美した。それも錫蘭邊に之を多く產する故で、今も其邊は世界で屈指の眞珠島と言はれる。其他は波斯灣、印度洋、紅海、西北墺斯答拉利の海で、其漁法は頗る危險である。

一艘の小舟に船長一人、潜水者十人、介抱者十人を備へ、介抱者の一半は舟を操り、一半は潜水者の身を保護する。眞珠貝は大概濱から十二マイル程の距離に在り、夜十時といふ頃其處へ舟を漕ぎ付ける。

潜水者は實に平素一定の食物を用ゐ、力めて身軀の平均の健全を計り、漁獵期の前は日日全身に油を抹り込み、水に浸されぬ用意を行ふ。やがて乘り出すとなれば、支度に掛かり、裸躰となり、耳に綿などを籠め、角製の器械で鼻孔を塞ぎ、口へは油を含ませた海綿を宛がつて猿ぐつわのやうにし、眞珠貝を捕つて盛るべき網を身に結び付け、水に入れば早く底に降るための手段として廿五磅ほどの石を足に吊るし、馬手に刀を持つて切下る。

水底に到着するや否や非常に手早く石を外して直刀を揮つて貝を取り離し、網に盛る、その間實に一瞬を際を争ふ。潜つて居る間は大抵一分か一分半ほど、それで七八個の貝を捕る是より上は氣力が續かぬ。呼吸は逼り目は眩み來る、實に生命を賭しての仕業で、やがて底から綱を引く合ひ圖を待ち、舟の上では急に引き揚がる、其揚げ方が遲かつたら無殘や潜水者は窒息して死ぬ。氣力の強いのは一日に四十回も潜る、その代り耳、鼻、口などから血さへ出る、其殘酷實に言ふに

言はれず、此苦心で捕つた眞珠かと思へば吾々とても身の毛が立つ。

殊に潜水中最も怖ろしいのは鮫で、人を見れば悦んで呑みに來る。一方忙がしく數多く捕らうと氣を揉むで、一方又四方に眼を配つて大敵の來襲に心付なければ爲らず、來たと見れば直ちに綱を引いて危く水面に引き上げられる是等潜水者がそれ故長生きせぬのも無理で無し、白髪まで生きる者は殆ど無い。取つて來た貝をばやがて後に剖いて眞珠の有無を精査するが、扨五十取つても百取つても其中過半何も無いのも有り、又時として一つから何百といふ金高の物が出る事も有る。近頃に至つては潜水用の服も發明になり、潜水者も以前より大いに危難に遇はなくなつた。即ち其服に一種の秘袋樣の物を置き、之に酸類を入れ、鮫の近寄るのを見れば急に壓して其液酸を海水中へ迸らしめる、然る時は其液が海水に融れて一種の鋭い光輝を放ち、鮫を威し、怖れて逃げ行かせるといふ工夫。

世界に名高い眞珠の二三を擧げれば大畧左の通り。

其一、くれおばとら眞珠　即ち有名は古代の埃及女王くれおばとらが所持したりといふ物で、後ち女王は之を酸液に入れて解かし、情夫あんとにいに祝酒として與へたと言ひ傳へる。

其二、まるびりあ眞珠　羅馬の豪傑しいざるが東國征伐の時、之を獲た。後ちしいざるから之をぶるたすの母さるびりあに與へたもので、二十一萬圓の價があるといふ。

右の類其他同樣ゆゑ省き是で、眞珠の概畧の筆を終らせる。



文藝

朋友と助力

寛水生

朋友の窮を見ては、その請求を待つまでもなく、助力の情を禁ずる能はず。

而して人の天性に多感なると少情なるとの差異はあれども、大概その交りの深淺に應じ、その收入の高下に隨ふて、相當の助力を爲すなり。

天性多感の人にして、最も深交ある朋友の窮を見ては、その收入の過半を擧げて朋友を助くるもあらん。天性少情の人にして、淺交の朋友が窮せるを見ば、冷然看過して助力せざるもあらん。廣く世間を看渡したる處にて、多感以下、少情以上の人物多きが如し。故に其交りの左程に淺きにあらざれば、固より相當の助力を否まざるべし。

富者は收入の十分の一を與へても寧ろ多きに過ぐべく、貧者の收入の十分の一を裂きても自家の生活に差支ゆることあるべし。故に一概に言ふべからざる場合もあれども、普通の生活を爲せるものは其の收入の三分の一ぐらゐを割與して吝ざるの朋友數名を有すべし。勿論數名の朋友が時を同ふして窮を訴ふるときに於ては、此の例を蹈むと能はざれば、かゝる場合は例外たることと言ふまでもなし。

若し世に、我は斯の如く窮せり汝何んぞ我を助けざるやと言ふ者あらば、其人は朋友を誤解せるなり。朋友は相手の請求を待ちて助力する場合もあれども、寧ろ請求を待つまでもなく、相手の境遇を一見して同情を湧起し助力を與ふるの場合多きが如し。

窮乏の爲めに朋友を責めて、却て朋友の同情を沮遏し、

窮乏の爲めに慈善家の傳を書きて、慈善家をすら嚬蹙せしむるは、士君子の耻づる所。否な少しく世態人情を解したる者は斯る思慮なきことを爲さず。嗚呼閲歴經驗の淺きは罪なる乎。人情を誤解せるは罪なる乎。朋友を誤解せるは罪なる乎。淺きは深きの始めなり、誤解せるは眞解するの階梯なり。

工女の咄

筑峰女史

妾は遠き廣島の生れにて、まづしからざる身なりしも、不幸のもとひは、幼きころ父を失ひ、悲しさははらからやからなかりしかば、母親一人りを力草にし、母も妾を杖柱とたのむにかひなき女子の身なれば、爲す事もなく春と過ぎ夏と暮れ行き、いつしかにわつか斗りの財產は座してくらへば山もむなしと、今は借財所々に出來、いかゝなさんとゝつをいつ親子首をあつめて思あんにむねのみ痛めける。折からある紡績會社より職工あまた雇ひ入れの爲め周旋人は先日より來居り、そこかしこの娘共を數多雇入れ、近々にこの地を出立ちすときゝしものから、思あんを定めて何ほとく尋ねしに、賃銀も多く得られ、美衣美食心のまゝにて、積立も出來、何不自由もあらじとや、されば妾もかしこに行き働き稼せげば母上のみこゝろ少しはやすまらん、さわいへ妾がこの事を申出でなば、母上は何とてゆるし給ふべき、あゝいかにせんいかにぞやと、思案にくるゝ遠寺の鐘にあはれをさそわれて、みじかき袖をぞしぼりける。まつよい月のおぼろ夜をこれ幸ひとやれ門そうとうちあけて、我家の方をふりかへりふり返見て幾度も涙とともに伏し拜み／＼つゝ立あがり、などりはつきじ今はとて、なれし我家を後になしつゝ、こゝろざす道をたどり行き」周旋人の宿に行きたのみ

ければ、たやすく引受けて、最はや出立つ時こそなりと云ふにまかせて、一同に伴はれ、彼の紡績會社へ來て見けるに、こはそもいかにきゝしに違ふ有樣は、一種異樣の人氣にて、仁心美風の地に落ちたるはさてをきて、甲の週間は朝の六時より夜の六時まで、乙の週間は夕の六時より朝の六時まで、一身不亂に稼ぐといへども、得る賃銀はわづかにて、器械の音は雷の如く、部屋の温度は高くして、食事といふは麁末なるのみかゆる〳〵食する時間もなく、又よく眠むる事も出來ず、新せんなる空氣といふは毫も呼吸なさゝる故、日ならざるに顏色蒼然としてあだかも永く床就きし病人の如く、力ぬけ、躰も心もおとろへ、はては何とか工風し身退かんと手だてをめぐらせど、せんすべとてあらばこそ、病はいやます斗りなり。又時々は母上に送金せばやとやたけこゝろははやれども、日々積みゆく貯金と食料とに給金も殆ど盡きぬ。去らば貯金もて送らんとすれば中途にて引出す事は嚴禁なり、あなかなしかゝる無情の勞働としりなば、はる〳〵來るべきや、淺き女子の心より人の言の葉を眞にうけて、つれ出だされしは不幸は不孝、妾が家出せし其日よりは音づれとてあらざりしが、ある日の事に、悲しさはしらせ越したる筆のあとの見るに魂きゆばかり早く稼せぎて母上の恙のなきにまみ得んと、朝夕神にいのりつゝ稼げど、いとつらき勞働に今は如何にも堪へかね、人めを忍び泣くばかりなり、此はこれある紡績所に雇はるゝ工女の咄しにて、きくにつけても兩親の傍にて安樂に暮しゆく娘御たちよ、世の中にはかくまであはれの生計を爲す者のあることを忘すれたまはずに、親兄弟を大切に、家事學問を勉强し、我家の内に居て女子相當の仕事に從事することそきん要の事と思ふになん。

チェレー城下の盲女

富士子譯

その二

思ふこと
絶えせぬ胸の苦しさに　やつれ果しが櫻花
降る春雨に香ること　うきもなやみもいや深く
いろ香をましてマガレツト天津使ひと眺めなむ
主なき宿の淋しさに　ひとり言していへるやう
「彼は來ませりア、遂に　彼は歸りぬさはあれど
ヂヨンのおうなは彼か名を過ぎし三日の其間
呼ばゝざりけり來ませしかあるは遠くにおはすかや
月雪花のなかめさへ　見えずなり行く我か暗に
君は輝く星月夜　たどる夜路もいとあかし
松風の音につれなくも　相見し夢の破られて
ねられぬ夜半は別れにし　過つる月日數えつゝ
涙の雨のふるの屋に　音づれてなく子規
共に血を吐く思ひせり　來り玉へよノヲ君よ
樂しき契りよもや君　忘れ玉はじ朝夕に
我は守れり其ちかひ　春のあしたも秋の夜も
君いまさねば此世には　など樂しみのあるべきぞ
憂苦は身をは弱らせぬ　見るかげもなき此姿
鏡にうつす術もがな　アナ果敢しや人々は
永遠の世に晝あれど　我れには憐れ我のみは
とこよの暗にさまよさん　君はまさねばわが靈は
暗世をたどる心地して　我はなやめる女郎花
露の惠を玉はれよ　オ、情けある天神
わか傍にかの君の　在したまはゝ天照らす
日影でひしと思はねど　晝は綠のみ空あり
されど戀人バプチストは　情け宿せる美はしき
みどり色濃き眼あり　君か眼の其中には
絶えず輝く天の愛　淸けき戀はこれやこの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

天つ御神の御住居か　罪なけがれも白菊の
露香はしき君か手に——我手いざやと取り玉ひ
優しき胸をいだきつゝ　いたはり給ふ其時は
忘れはつべし世の富も　寶もおろか積りにし
心の苦をも忘れなん　さはさりながら此の月日
君在さばね我か衣　君を思ひてしのびねの
涙の乾く絶間なく　いづこに君やおはすらん
呼べど叫べど答へなし　我は倒れしつたかづら
たよる梢のなかりせば　枯れなんものをやよ君よ
われを哀れと思しなば　歸り給へや人はいふ
眞の戀は憂き事の　ありてぞいとゞ増るれど
さばれ我身は盲目とも　なりにしものを戀人よ
君か情けと我か思ひ　過つる日にもまさらざら
　　　　　　　　　　めや
さはあれど

誰か知るらめ白菊の　うつらふ姿いまはしと
我を捨しか忘れしか　あかぬまどひに沈むより
又歸りこぬ遠つ國　靜けき黄泉に行かまほし
されど御神よこの胸に　あだし思ひの出づべきそ
彼はきまさん疑はじ　彼は歸らん恐れまじ
いとも貴きイエス——君の　御手にちかひし妹と背の
ちぎりは深し己か意の　まゝになるべき事やある
旅にて疲れ給ひしか　あるは病てもおはすかや
姿かはりしこの身をば　せめて慰む心もて
物とゝのかへる給ぶか
「誰か來りぬ　アゝ君か
日頃戀しき　戀人は
きたり玉へり　よもやこは
他し人には　あらずかし
眼くらむも　あきらけく
心に浮ぶ　面影は」

かたえのとびら開かれぬ
いちらしや
切なる戀に乙女子は　見えぬ眼ながら立上り
嬉し涙にかきくれて　一ずにそれとやつれたる
雨の腕をば打ひろげ　抱き寄らんとすればこは
弟ポーロにありけるよ
「花嫁御寮の　エンジラは
こゝらあたりを過ぎぬらし
賓客數多　打つれて……
我に告げてよ　姉上よ
など御身と　我のみを
招かざりしか　村人は
老も若きも　行きにしを」
「嫁ぎしとかや　エンジラは
日頃親しき　我になど
其秘めごとを　告げざりし
いづこの誰か　色聟の
君となりしぞ　オ、早く〱
とく〱語りきかせてよ」
「ノオ姉上よ　その君は
御身か友にて　おはすなる
バプチストとなむ　きゝにしを」
果敢なさを
何にたとえん盲目なる　乙女はきくや耐え兼ね
一聲叫び倒れけり　つゞく言の葉打絶えて
嵐に散りし櫻花　きのふの色香消しごと
頰のあたりは蒼ざめつ　雪より白く繊き手も
金の如重くして　千々に砕くる胸の内
涙に息もとまるらん　暫時生命をさゝゆなる
心のほどぞあはれなる　唯悲しさに弟の

傍にたゝずむ乙女子は　外面の小田に朝な〳〵
立てる案山子に　似たるさまかも
松風に
交りて響く婚禮の　樂しき節もめしひには
身を裂く如く打聞え　憂もなやみもはや深く
いや増さるこそ　あはれなりけれ
「きゝねかしあの面白き　歌の節
歌ふしらべを　姉上は
聞き玉はずや　人々が
いとこのしげに打笑ひ
たはむれくるひ祝ふらめ
など姉上と　我のみは
其場に集ひ　得ならぬか
我は今より　美はしき
あやある上着　あるはかの
手織り縞なる　灰いろの
下ばきつきつ　飾らまし
さすれば　彼等必ずや
招くなるらん　そは明日の
七時頃まで　配はねば」
「そは能く我も　知るなり」と
盲目は一こゑ　答えしぬ
さやけき玉のそれならで　光も見えぬぬば玉の
くろきか如きまぼろしは　又も乙女をなやませり
冬の夜寒にとぢはてし　氷とまがふ其手もて
憂ひに充つる胸先を　碎けん計り壓しゝめぬ
鐘打つ人のらせん機を　使ふか如く壓しゝめぬ
「弟よ歎くとかは　御祭の
けふといふ日に　悲しみぞ
あてなる衣は　あす飾れ

さはさりながら今暫時
此場に獨り　殘してよ」
跳びつはねつゝ無邪氣にも口笛吹きて出行し
ポーロの後に跛子の　ジョンのおうなは訪れにけり
「いときよき
乙女の君よすさましき　わか此熱よかすかにも
いづる息さへ消ゆらむと　思ふばかりに疲れけり
なはなで此くも冷たきぞ　死人の如く冷え渡る
とはそもいかに愛らしき　幼き友よいたいけな
何を愛ひてかくやある」
「何を思はん花聟の　住家に響く歌の聲
松吹く風に通ひくる　しらべを聞ばありしことを
忍ばれにけり過し日に　我は思ひき世に出づる
日出度き時はいと早く　來ぬらん事と我か爲に

ウイットサイドみ祭りに　御身か取りし其みくち
など僞りのあるべきぞ　いとも嬉しき豫言の
わか傍に彼の人の　在ませし折は卜者の
御身か業はいや廣く　いや高しとぞ見ゆるかも
あはれむべきのバプチスト御身は何とのたまひし
彼は思はんかのちかひ　遠き昔の夢なれと
我あやまてり今ぞ知る　彼の心の果敢なさを」
「我こと〳〵く汝か愛を　よみし能はじ人は皆
幸福とふものにいや深く　まかすまじき戀人のため
もゆる心のほむらをば　靜め玉へと大神の
御元に行きて祈りせよ」
「祈らば猶も戀衣　涙にくれてあさましや
祈る度毎わか戀は　かぎり知れずなるぞかし
とはこれ罪にあらざらん　神は在せりわか側に」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞理の洩す言の葉は　かくて足りなん一言も
答えざりけりぢうな　ヂヨンは
今ははや
未來の望消え失せて　忍ぶに耐えぬ涙川
深き心を見せじとか　おうなの前には乙女子は
いとやさしげに物かたり　今日は好日よほがらかに
晴れたる日よとかたりつゝ情をこめし言の葉の
洩るたびごとに打笑みぬ　かくてあざむく其人を
あざむきにけりそか故に　袂を別つ夕まくれ
獨り言していへるやう　「乙女の君は救はるも
知らでやまさん何事も」
いやしきヂヨンよ惡むべき魔使ふ人よ今は汝は
預言者にてはあらざらん　心あふるゝ此の朝げ
常にはくしき其術と　御身自身は中々に
隔りにけり遙かおとりて

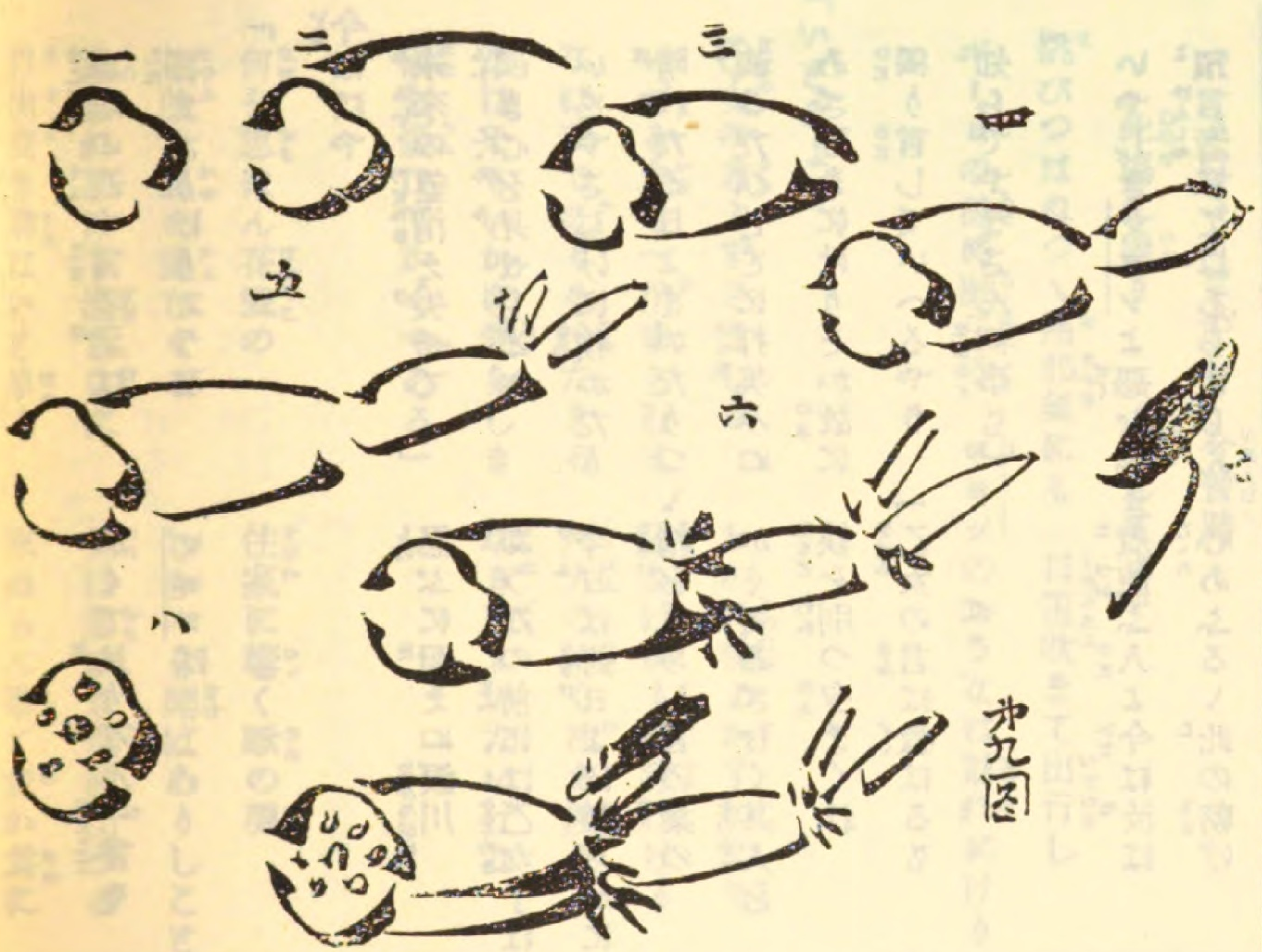
繪畫

畫學の栞（八）

金仙

蓮根　左の順序を見るべし、

（一）蓮根の先より始む、二筆にてうねりて圓形を造る、
（二）一筆に、最も筆意を見す可し
（三）は下より筆を使ふて（二）の筆のあとに合す、
（四）も同しく、
（五）同じ、輕き筆、先きに至りて筆を終り、（イ）を添ふ、
總て蓮根は一ふし〳〵に切りて畫くべし、
（六）其一節の間より根を生ず、故に筆、細く其根を畫くなり、



第九圖

（七）は芽出しの蓮の巻葉、二筆にて即ち（ロ）を先に（ハ）を後にす、畫き終りに莖を附し、其節につく、

（八）は蓮根の切り目にて穴あり、大躰五ツ六ツにてよし、是れは一筆に輕く畫く可し、

其完了なる第九圖を見よ、

最後に（二）の添へ筆を加ふ、

墨色は、蓮根は淡墨、其根と葉及び穴は少しく濃くす、

家政

會話の心得

學問を勉强する人は澤山にあり、健康の發達に心がくる人は澤山にあり、遊藝を修業する人は澤山にあれども、會話の上手にならん事を心掛くる人は眞に稀れなり。

されども、會話の上手なる人は、その人の一生を、社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會に愛せられ、社會に持て囃やされ、而してまた社會に害を盡くすを得る一の道具なり。人の智識の中の十中八九は、會話によりて得し所なりと、古賢の云ひけるは、如何に會話の大切なるかを示せる名言なるぞ。我等が知らざる人に初じめて對面せんに、未だその人の性質も知らず、人物も知らずと雖も、何とも云へざる一種の引力を以て人を引き着くるが如き感じありて、其人の傍を去るに忍びざるの感じを起さしむるは、會話の力なり。人を敎育し、若しくは人より敎育を受くる唯一の手段は、會話なり。實に會話の巧拙によりては、益すべき問題を以て人を害し、又た己れをも害するとあるに至るべし。

如何にせば、會話に巧なるべきや。と云ふに譬へば若し友人に對して忠告せんと欲するとある場合ならば先づ先方の地位と、その希望と、性質と、及び先方より言ひ返すべき口實とを考へ、次ぎに此の方より云ふべき順序を引きくらべて後友人の許に行き、柔さしき言葉を以て己が心を打ち明かし、親切を以て、靜づかに忠言を始むべし。人の心を動し得べき談話は、かくして出來得べきなり。其他は凡べて之に準ずるものと知るべし。元來談話は即ち樂みとのみ思ふ人は愚なり。之は人にとりては一の稽古にして、又た品格を作る一の機具なれば、注意して勉强せざるべからず。

談話は實に有益なり、されど會話を重んずる人のために二の危ふき事あり。一は心にもなき親切、心にもなき世辭を述べて、人を瞞着せんと思ふ人あり。かゝる人は人を瞞着せんとして、反て己を瞞着する也。己れを瞞着するとは、己れより出でし僞善が、己が天性を造るに至るを云ふ。第二は會話によりて間違ひたる智識を得る事あり。書物にさへ時に想像の記事ありて信ずべからざる事あるを、まして會話によりてのみ智識を得んとする人には、間違ひたる事實を、誠しやかに

覺込む事はめづらしき事にあらず。かゝる人と雖も、勿論多くの談話の材料を有し、面白く語るの能力は有し、何時にても語り得るの用意はあれども、時々間違ひたる事を話すが故に、之を聞くもの信ずる能わざるに至る。

集會に付きての心得

多くの人と相集まりたる處にては、自分獨り呑みこみたるつまらぬ事を話して、人を飽かしめざるは勿論、他人がつまらぬ事を話すにより、面白くなくして一座のしらけたる時は氣をきかして、集會中にて、談話に巧なりと思ふ人の前に行きて、其人の口を開かしむるため、種々の問題を提出すべし。つまらぬ人が話しの事實をなして一座を亂すは然るべき人が話なさゝるが故なれば、上手なる人の談す時は、下手なる人は止むべし。恰も太陽の光線の出でざる前に、月や星がいばるが如きものなればなり。特に集會の中にて話す時は、人々が大切なる時間を拂ひて聞く丈けの價値ある談を爲すべし。又た所謂蔭口とて、その人の居らざる所にて、その人の事を話す事を忌むべし。

アリストーフワンと云ふ人はソクラテスの敵にして、言を以て種々に彼を傷け、遂に淨瑠理に迄で作りて彼を罵詈したり、その淨瑠理は遂に演戲に作られて、演ぜらるゝに至りしがソクラテスは何とも思わざる如き顏付きをして、終始一度も己れを讒謗せし人の事を惡しざまに言わざりき。彼はそれ程アリストーフワンの事を何とも思わざりしか、否彼は死に臨んで左の事を云ひたり。

> 已が友人の弱點や、不完全の事を嘲弄する人は、又た遂には他人より其人を笑ふの時ある事を覺悟せざるべからず。たとへ實際他人より嘲を受けざるも少なくとも、靜かなる時に自ら顧みて、人より嘲やせまじと心配する人となるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と云へり談話の話柄は、種々ある中にも、人の事を材料として蔭口を語るは最も悪しき事なり。(未完)

此頃の食物

生理の上よりして、此頃の時候には、酢の食物を食する事は、身躰の必要に適したるを、人々多くは知らずして、偶然にすし、生酢等を、食する者多きは、奇なりと云ふべし。海上を數ヶ月旅行する舟子、鹽物の乾物に日々を支さゆる貧民は勿論、鹽鮭、鹽豕の多き、冬を過ごせる春には、酢は躰中に必要あり。その故如何と云ふに、酢は彼の敗血病とて、躰中の血液の古く、黒くなる、恐ろしき病氣を未發に防ぐの効あるによる。

此の頃、ロンドンの外國輸出會社にては、其の會社の舟子たるものは毎二週間ごとに、レモン若しくは石灰水二オンスを用ひざるべからずと云ふ、規則を發したり。これは舟子等が旅行中に、鹽物を多く用ゆるにより、右の恐ろしき病氣を、發する事勿からしめんがためなり。此病氣の甚だしきに至りては、勿論醫藥を用ゆるにあらざれば醫するを得ざれども。少しの病氣は、青き野菜物、或は果物を多く食するによりて、回復するを得べし。身躰非常に衰弱し、或は何となく不快なる等は、疑ひもなく此の病氣に罹かりしものなれば、必して酢のものを用ゆべし。酢の食物の中にても、赤茄子の酢びたし、酢氣の多き果物の鑵づめ、萵苣、蒲公英等は、最も有益の食物として算へらる。

赤茄子の酢びたし

右の病氣を醫するの良藥として算へらるゝ、赤茄子の酢びたしは、赤茄子の未だ熟し過ぎざる者を取り、皮をむき、薄く切りて、數時間水にひたし、能く〳〵あくを抜き、籠の上に引き上げをきて、水を去りたる時、

酢に少量の砂糖を和して用ゆべし。萵苣は通常鹽にてもみ、酢をかけて用ゆる事は、人々の知る所なり。蒲公英は、ひたしものもよけれどもひたしものを好まぬ人々は未だ枯死せざるもの丶茎計りを集つめ、砂糖と、水とにて、三四時も煮、之に醬油を和して、又た〳〵二三時間煮て、茎のすき通る計りの色となりたるを度として、用ゆる時は、一種の美味なり。

豌　豆

佛蘭西風の料理に隨たがへば、凡て青物は、十五分乃至二十五分より長く煮ず、ことに豌豆等は、長く湯出でる時は、甘味を損するを以て、沸騰したる鹽湯の中へ、十五分計り入れて、引き上げて、能くさまし、之を俎板の上にて、能くきざみ鍋にうつして、バタ、鹽、胡椒を入れて、味を付け再び火上に置きて、温まりたるを度とし皿に轉して食卓に供す。

子供の遊び

や　ぎ　生

子供の遊びは、畢竟大人の爲す業を眞似るに過ぎず。八百屋を見れば、八百屋を眞似、豆腐屋を見れば、豆腐屋を眞似、肴屋、新聞配達、さては、らんぷの屑買など、見るもの聞くものあれば、早速にこれを眞似て、遊び戯るゝなり。又神社の祭禮に伴ひしときは、歸るやいな、いかゝはしき屋臺を造るやら、これを曳くやら、果ては泣くやら、笑ふやらにて、座敷中に玩弄物を亂すなり。抱腹に堪へざるは、嫁入りの眞似、また忌むべき乞食の眞似を爲すこともあり。女兒の男裝することもあり。遊びの中にて有益と覺ふは、贈物の遊びなり、これは到來品のありしを眞似たるにて、即ち土の竹皮包、紙の小切、草花等へ手紙を添へて贈るなり、手紙の文句も面白し、今取り候間上ゲヨー、紙一帖進

上致候間鼻と目をフキ度候、此ハナ有リガタク差上候などなり、またこれを受けたるものは、一々禮手紙を出すなり、これにも奇妙の文字あり、然して此手紙には、一と度び使用したる郵便切手を貼付し、自ら郵便と唱へて送り届くるなり。かゝる遊びは、樂みの中に知らず／＼用文習字を覺へ、修學の助けともなるべし。

かくの如く子供は見聞したるものを記臆して眞似るなり、故に子供に見聞せしむるには、成るべく有益なるものを撰ぶが肝要なり、且父母も亦注意して自ら行ひを謹まざるべからず、子供の行爲を叱り置きながら、自らこれを行ふことあり、かゝる場合に子供は爲したることの非なりしを、顧みざるべし、即ち子供が猥褻なる歌を覺へ來り、得意になりて謠ふとき、これを叱りながら、徒然の節嘗て子供に禁じたるもの謠ふ如き、或は摘み食ひはならぬと禁じながら、自ら摘み食ふ如きなり。

子供は總べて、見聞に依りて、智識を增進するものなれば、父母は常にこれを忘るべからず、宜べなる哉孟母が居を三遷せしは。

婦女職業案内

履物の表編み

内職は家庭にて働くものなれば、成るべく手數を要せず、嵩張らず、家内の亂雜にならぬやうの職業を撰むが宜し、左なくては餘り家内の五味だらけになり、道具等の取擴がれば、家の中ゴタ／＼して掃除取片付にも困る事あり。道具を要し手數を要してすれば、隨分利益となるべき職業多けれども、内職には先づ手數のかゝらず道具の要らぬものを撰みて充分なり。

目下東京にて最も流行する内職は、履物の表を藤にて

編む手業なり、履物の藤表は先づ上等の履物につくるをもて、決して一束三文の內職にあらず、隨分品もよく、且つ之を編むには別に道具を要せず、一本の錐と兩の手を用ゆれば夫にて澤山なり、此內職を爲すには二樣の仕方あり、一は藤疊問屋か大なる下駄屋に就き、十枚幾錢と編賃を定め、藤疊の材料なる割藤と馬糞紙と稱する粗雜の西洋紙を其問屋又は下駄屋より請ひ受け、內職者は唯だ手間賃を取るのみ、他の一法は內職者自身にて藤及馬糞紙を買入れ（藤は履物疊用にするやうに裂き割りて其道の店にあり、決して自家にて裂割するの面倒あらず價は上中下の區別あり、又疊の心に入るゝ馬糞紙は最も粗末なる西洋紙なれば履物一足用にて三厘か五厘のものなり）是にて疊を製し、最寄の履物問屋又は小賣店につき、履物疊の製作品を持ち行きて買取り貰ふなり、疊は最も必要なるものなれば、履物商に於ては必らず喜びて買取るべし、直段は其時の約束にて一定せざれど、最も直能く買取る店にて賣らば利益多きこと勿論なり、又前なる問屋の注文を受けて手間料をのみ取ると後なる方法則ち自身にて萬事製作して履物商に賣るとは、利益の點に於て後者二三割も利なるべし、然しながら自身にて製作品を持ち行き商人と應對駈引するは、餘程熟練したる後則ち黑人とならざれば覺束なき事なり、素人には矢張問屋の注文を受け、十枚何程と手間賃を定めて、唯だ其の手間賃のみに安ずるを以て足れりとす、而して此內職を爲す方法は、最に述べたる馬糞紙を長楕圓形に切り、其內に竪に二條の細穴を開け、藤を編みくゝらす爲にし、藤は恰も席又は織物を織る如く、少しく太き四條の藤を緯としたるものにより、橫より引〆め〳〵編み行くなり、斯くして得たる長楕圓形の疊に鼻と橫の三個所に錐もて穴を明くれば、最早夫にて出來上りたるものなり、此內職を爲さんとならば、現に內職し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つゝある人に就きて一日も敎えて貰はゞ直ぐに合點行くこと疑ひなし、扨此内職一日の手間賃は其熟不熟と製作者の善悪とによりて高低差等あれども、問屋の注文仕事をするものにて、十足分五十錢より一圓二三十錢迄の間なり、而して一日の仕事高は熟練者にて二足或は二足半、未熟者は不勉强すれば一足も出來ぬことあり、素より夫より上等は注文により手間賃に一定なしと知るべし、自身萬事賄ひ問屋又は小賣履物商に卸すものは、孰れも熟練者なれば、諸入費を引去り一日十錢乃至十五六錢は容易に得らるゝ由なり

手藝案内

縫方の種類

縫方の種類名目數多ある中に其の重なるものを擧ぐれば左の如し

兩方(端物の)の縫代を合せて、一方を下に伏せ大針にて綴ぢつくるを綴縫といふ

風呂敷の切縁又は單物類或は襦袢等の裾廻等を三枚に折りて縫ひつくるを伏縫とは申すなり

蒲團、帶(男女共)、紐等を縫ひて合せて、縫ひ合せ目の表より針目を見せざるやうの縫方をくけ縫といふ、必要なる縫方なり

他の縫目を正しからしめん爲に、則ち其針路を示す縫方を稱して壓縫又はしつけ縫と稱して糸は重に白を用ゆ

縫ひ合せ目を丈夫にする爲に一度縫ひ合せたるものを折返して再び縫ふを返し縫といふ

二枚以上の小切を縫ひ合せて一枚とする縫方をはぎ縫といふ、これに三種あり、一を「わりはぎ」、二を「かけはぎ」、三を毛抜はぎといふ、「わりはぎ」は通例のものにして、「かけはぎ」は二枚若しくは數枚の小切を縞目

布目を精密につぎ合せ一見一枚のやうにするをいふ、

毛抜はぎとは地の厚き布帛をはぎ合する縫方をいふ

「シャツ」「ヅボン」下等の手首足首等を一所に寄せて縫ひ縮むるを寄縫といふ

縁を縫ひからぐるをからげ縫といふ

寄縫又はからげ縫を終りたる後別に飾縫を爲すを飾縫又は環縫といふ之は重に「ミシン」の針にかくるなり

養蠶術（續）

蠶室の搆造——蠶室も人家と等しく衛生上の事に注意せざるべからず、則ち土地高燥にして空氣の流通宜しき所に蠶室を搆へ、成るべく東向か南向きにすべし、これ午後の陽熱蠶兒に害あればなり。而して蠶室の廣さは先づ通例のものにして間口二間半奥行三間位となし、飼育の多少に應じて間口を倍蓰し、內に障壁を成せば夫にて宜し、其高さは通例二階屋の如くし、二階の床は一面に張らずして蠶座を扱ふに差支なき限は、奥行に中央一帶を開けて爐温の上通を妨げず、室內温度の平均を害せざるを宜しとす、爐は通常二尺四方の大さに室內の中央より少しく北の方に切り据ゆべし、若し二階の床板を一面に張る時は、二階に丈け低き火鉢を適宜の場所に設くべし、床板を一面に張ると否とに關せず、張りたる部分は、釘もて打着けずいつにても板を建て外づし得べきやうに恰も假二階の如くし、二階屋と平屋とを問はず、天井の中央を方三四尺位に切り取り、簀もて之に代ゆ、之をこれ空氣抜と申すなり、此空氣抜の簀の上には一二眠の頃は、蠶兒幼にして蠶坐數も少なく、吐出す炭酸氣も多量ならざるゆゑ菰の類を蓋ひ温度の漫散を防止するを要す、倘ほ天井の四隅に引窓をしつらへ置き温度の加減を便にし、又室外に廊下を設くれば便利なる事申すに及ばず、床下には空氣の流通を能くし、且つ時々掃除を怠らずして、蠶兒の厭忌する汚穢物を除去し、又家造は梁上に簇を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上げ、成繭せしむる爲に吾妻形に搆造し、屋上に幾個の引窓を設け、空氣の流通を便にすべし、但し新築なれば生壁の側に蠶兒を養ふべからず。

蠶棚――蠶棚は奥行通りに室內の兩側に取外しの出來得るやうに結搆すべし、柱は木を用ゐ、梁は竹を用ゆるを簡便なる法とす、而して梁の每距離を六寸とし、成るべく蠶座を室內兩側に壁際に密接せしむべからず、先づ少くとも五寸以上の距離あらしむべし、然る時は空氣の流通、溫度の循環を自在ならしむるの利益ありと知るべし、此外に桑刻塲等は別に適宜の塲所を設くるに過ぎることなしと雖も、內職にする少々の養蠶の爲めワザ〳〵蠶室を建築するは、甚だ大行に聞ゆれば住家の奥の間にても宜し、一室を取片付けて飼養して差支へなしと知り玉へ。

蠶室の準備――養蠶に着手せんとする前、即ち毛蠶掃立ての前十日頃ともならば、室內を丁寧に掃除し、コハコベ草をもて室內の床板及天井板を拭き清め、諸器具をも清潔に拂ひ拭ふべし、殊に蠶坐の如きは、二三日間日光に曝らして充分乾燥せしめたる後、能く〳〵塵芥を拂ひ去り蓬にて拂ひ、內に粟糠を入れ蠶棚に上げ、而して焚火もて暖氣を與へ、充分に蠶室及蠶具を乾燥ならしむべし、又新製の藁座ならば、寒中凡そ二十日間計り清淨の水中に浸し、以て藁の油を脫き、之を乾燥せしむべし、但し掃立際ともならば、炭火にて室內の溫度を華氏六十五度位にすべし。

養蠶器具及猫――蠶兒を飼養する器具は第一蠶座に用ゆる藁坐と稱して、藁を編みて徑二尺六七寸胴四寸位に製せしものなり、次は籠、これは長五尺九寸幅三尺四寸許の目籠にして底に二寸宛短き莚を布く次は簇と稱し通常の莚の大さにし、之に笛を入れ、熟蠶兒をして結繭せしむる器なり。其製法は細き藁細もて藁を編むこと恰も葦簀を編むが如くすること六個所、其の屈

撓を防ぐ爲に表裏より割竹を兩端と中央の三個處に當て置くべし、扨熟蠶兒を放たんとするには、兩側を第二の編目より折り細にて引き抑へ蠶兒の匐ひ出でぬやうにすべし、次は竹製桑篩にして蠶兒の幼少壯の食餌に爲に用ゆ、素より大中小なかるべからず、其他掃除具、熟蠶箱、熟蠶盆、蹈臺、時計、乾濕器、桑を運ぶ脊負籠、刻桑を入るゝ笊及箕、毛蠶を掃き立つる羽箒(多く鴨の羽を用ゆ)桑俎、桑切庖丁、桑切鎌、下立用綱等なり、而して猫も亦蠶具の中に算入して可なるべし、何となれば家鼠能く好んで蠶兒を食ひ、一二齡の頃鼠の爲にして遣らるゝ事多し、故に猫も亦養蠶に必要なるものにして、若し猫を飼ふことを厭はゞ鼠地獄を用ゆるも可なり。

籾糠と粟糠――蠶座の濕らざる爲に蠶座に籾糠又は粟糠を撒布す、或は籾糠を舂て紛虀となしたるものを用ゆれば粟糠に比し粗大なるが爲に取扱上便利にして、而も空氣の流通に利ありと雖も、實驗上より言へば粟糠の柔軟なるに如かず、然しながら蠶座の下層に籾糠を用ゆる方便利あり、而して籾糠は之を舂く前、粟糠は其儘水にて洗滌し能く／＼沙塵等を除去すべし、籾糠の蠶兒に對する割合は、籾糠は二齡より四齡まで蠶座百枚の入用凡そ四石五斗、原紙一枚凡そ三石宛にして、粟糠は右に對する一斗二升內外にて餘あると知るべし。

社交一斑

流行の栞

春夢

目下の袷衣

九十日子の春風消盡してこゝに牡丹、菖蒲の時候となりぬ、時は恰も夏の始めにして素袷の肩合輕快なり、故に目下袷衣流行の二三を記さん

婦人袷衣――令閨向にはお召紋織、光輝織にして柄は角通し、

行儀あられ、横波鱗、大小あられ、吹雪、立波繋き、鹿茱亂、鎧縞角繋ぎ、一升絣、割山椒、大小角通し、算盤繋ぎ、石疊み等にして令孃向には同上の品質にして、柄は羽崩し、寶繋ぎ、違ひ矢、斜波、並び矢、伊豫縞、亂菊、雲龍、龍田川、紋縞繋ぎ、横菱繋ぎ、及中雨絣、矢絣等にして色合は前後通じて淡藤、お納戸、鐵お納戸、藍鼠、櫻鼠、茶鼠、空色、紫、利久等なり、價は十一圓五十錢より十三四圓迄に止まる、次は普通のお召縮緬にして柄合は例の如く崩し、微塵を以て流行の最とす價は七圓より九圓五十錢迄の品と思はる、他は小紋縮緬にして多くは二枚重にて着するを見受けらる

男子袷衣——第一は例の市樂織、第二繋糸織第三縞糸織、第四結城紬、等にして地色及柄は通して紺地に鼠の大名萬筋微塵を以て最流行とし、他は崩し、木賊の類にして色合は藍鐵、肉色、白茶等總して淡色が最も需用多きやに見受く、次は大島紬の珍絣にして淡花絹の裏地を附け合せたるもの最も行はる、扨て昨今の陽氣には追々縞セル、「フランネル」着用の時季となれり、柄合は男女を通して淡色鼠地に小紋、崩し縞、立縞、絣等最も流行の勢力を占む價は「フランネル」三圓より三圓五十錢位「セル」にて四圓より六圓五十錢位にて昨年に比し銀貨下落の結果を受け、五分方の騰貴を顯はしたるが如し

夏向日本服

はや立夏の候ともなりければいざやこれより夏服の流行を栞せんに婦人物は前頃婦人の袷衣に等しく相變らず小紋のお召にし、地色はます〳〵淡泊なる方を喜ぶ、次はお召のお納戸、紺地の雨絣、十の字絣にして、他は都花織を以て流行の新なるものとす、柄は矢張淡色に小紋、微塵等頗る珍柄に富む、次は羽お召、縞壁チヨロ、薄地お召の類にして柄は前述と異ならず、價は通して六圓五十錢より八圓位の物と思はる、次は上州お召(價五圓より六圓中位のもの)の淡色地微塵竪縞、次は銘線(三圓中より六圓位のもの)絣、お納戸、鼠の十の字絣、雨絣、珍絣等最も流行の傾向を有す平民的流行の傾向あるものは紅梅織、武藏野織(二圓五十錢より三圓中位のもの)及瓦斯糸結城(一圓中より二圓中のもの)等とす、羽織の流行は婦人にはなし、偶々羽織を着るものは流行外の人なり

男物は市樂織、壁糸織、吳撰織、結城紬、銘染節糸織等にして地色柄合は通して前記婦人物と等しく凡て淡色、微塵縞流行第一の傾向を占む、紺地に大名萬筋の如き眞面目なるものを着する人は商人たること疑なし、右の價は市樂壁糸は七圓中より十圓位のもの、吳撰は六七圓のもの、結城は縞物にて五六圓のもの絣にて七圓より十二三圓のものを多く着用するが如し銘線、節絲は三圓より五圓位のものならんか男子羽織は紋附にては黑絽(四圓中より八圓位のもの)の三紋九分の流行を占領するが如し他は縞にして地質は博多絽(五圓中より七圓中位のもの)次は吳撰(五圓中より六圓中)次は平お召(六七圓位のもの)次は紅梅撰糸(三圓中より四圓中)次は薄地ものにして透屋(一圓八九十錢より

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二圓二三十錢のもの）又透屋にして稍地質の厚きものは紅梅又は壁透屋と言ひ、價は三圓半より四圓半位のもの需用多き由因に記す本年は殊に日本橋通一白木屋にては種々なる珍柄を蒐め已に夏物賣出し居るが來六月一日より三日間例の夏物賣出を爲すと聞けり

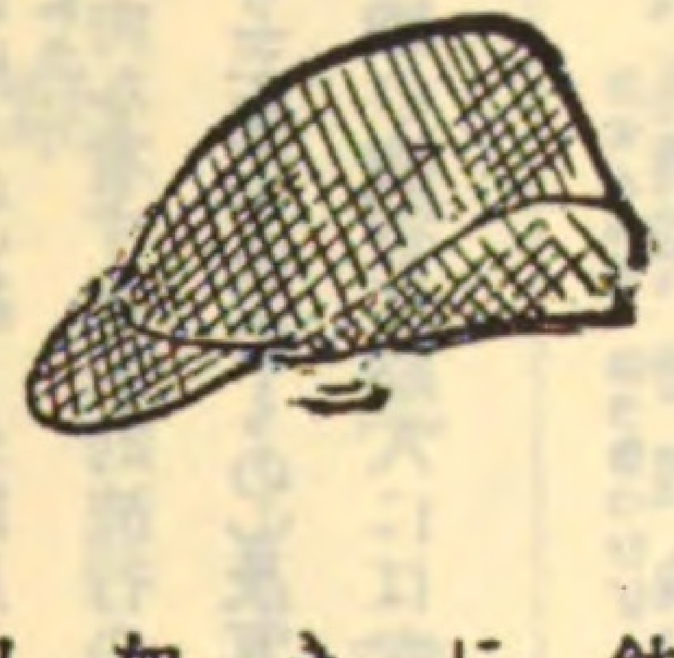
夏白洋服

景氣は餘り捗々しからざるも去とて振はざる方にてもなし、要するに昨年に比して大差なからんか、而して其流行は相變らず、襟の開き方廣くして「ヅボン」の緩なるを尙ふ、其地質は「フロック、コート」黑の一本綾羅紗相變らず流行にして次は斜綾若しくは黑無地なり、價は十五圓より十八圓、上等は二十三圓位のもの着用者多し、次は「モーニング、コート」地質は「フロック」と同じく、價は十二圓より十六圓、上二十圓位のもの之を縞柄にすれば十五六圓位の由、次は脊廣、地質は薄地羅紗及「セル」等を多く用ゐ、其柄合は鼠茶、淡鼠等の格子縞最も流行に適す、價は十圓より十二圓上十五圓位のもの、以上は凡て三揃の案内なれど、「ヅボン」を竪縞物に更ゆるは殊に面白し、次は「オヴァー、コート」(塵除)六圓より十二圓位のもの、地質は「セル地」絹綾等なり、白木屋專賣の角袖外套（日本服の上に着するものにして吾合羽と同じきもの）價五圓より十圓位までのもの、其の仕立の格恰はいろ〳〵と知るべし

流行の夏帽子

また冬帽子をかぶくもの多けれど、昨今弗々麥藁帽子を戴くものあり、未だ流行を知るは六かしけれど、唯今までにて觀察すれば、麥藁帽子は矢張り昨年流行せし例の『鬼編』と稱する編方のトゲ〳〵したる者なり、大も小形にして縁狹く山高からず、たゞ本年のものと昨年のものと少しく差異を見るべきは、鉢卷の布帛の廣き點なり、本年のものと







三



四

鉢卷は殆ど山際を蔽ひ一枚に張りたるものあり、卷きつけてピンにて止めたる如き形容もあり色は黑又は白色を尙ぶ、種々なる模樣又はいろ〳〵に綴ぎ合せたる如く見ゆ鉢卷布帛を附すれども流行の傾向あるは黑色なり其流行形は第一圖の如し、第二圖は一寸鳥

打帽子に似て非なるもあり、これは形鳥打帽子の如く目庇あり山の格好も其の如く、唯後部の折返りたるものにて、山淺ければ頭部の頂邊にちよいとかづくも多く、西洋人抔は直に此の帽子を戴きて馬に跨り或は自轉車を走らすなれば、馬乘帽子又は自轉車帽子と稱呼するも可ならんか、縞の「セル」又は海羅紗にて作れるもの多し、第三圖は「キャプテン」形にして船長の帽子なり品質は海羅紗にして白又は霜降流行第一位にして、これは夏向帽子のみに限らず昨冬より冬帽子としても製せられ、山高帽子の紳士が一寸出にかづくもの多かりし、夏向のものは價冬のものに比して下廉なり、第四は「赤んぼ」の帽子なり、通例西洋にては赤兒や小兒の帽子は「レース」製作品(前號舶來夏物の中に記載したるもの)なれども、第四圖は本年新に發明したるものと思はる、帽子凡て紗にて製し、上に點々美麗の裝飾を附しあれば、帽外より赤兒の頭髮明かに洞見せられ輕き事はいふに及ばず夏向には至極の品なり、價も廿七八錢にて購ひ得らる

丸髷と銀杏返し

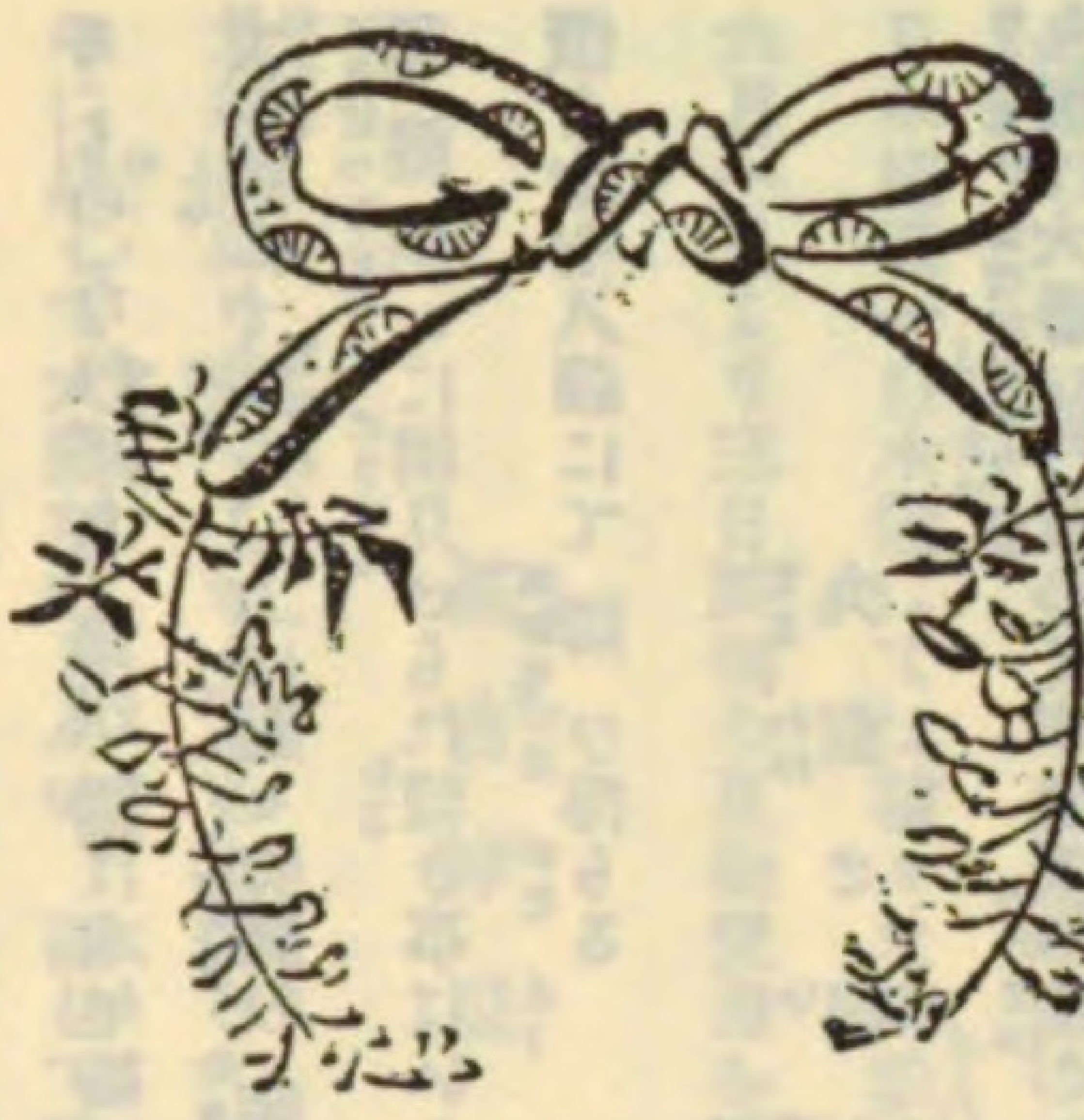
丸髷は大形流行にて昨今は角髷ともいふべき根高からず低からず大概頭の中央に結び鬢タボ共に頃合に出すとなりたり又島田髷は相替らず大流行にて昨年來中高にて品格好き形流行なりしが近頃は又淡しに結ぶ者追々增加し目下中潰しとて品高尙にして意氣に結び上るとなり二三年以前の大新造に高島田も似合ざる處より此流行を來したるならんか其他の娛り髷に至りては銀杏返しを第一とし一時廢りたる唐人髷の如きも昨今はチラホラ結び始めたり

銀貨入と手提

袋物流行の中銀貨入と手提の流行品數多あるべけれども、近來一寸行はれ始めたるは銀貨入にて『黃金袋』と稱するものなり、其形は圖に依りて示すが如く『黃金』の形を爲し、布帛地を繻珍又は摸樣革にて製す、口を締むるはゴムにて兩輪の引懸を用ゆるものあれば、紐にて結ぶものあり婦人用に相違なけれど男子の使用するも見受られたり、色は淡色に鶯縞又は畝織の如きもの流行價は三四十錢のものなり、手提も種々なる形なれど、近ごろ面白き形は、殿居形と稱するものあり又は信玄好と稱して武骨なる合財袋なり、復古も流行とは昔へ天正の昔に返るとは甚しといふべし、價は一圓內外にて購ひ得らるゝといふ



黃金袋



藤結び（平民的）

多くの説明を要ゐず、頭髪に心懸らるゝ婦人は上圖によりて其の何者たるかを爽く了得せられん、藤の花の盛りなるに人の黒髪にも藤花開く、價は最も平民的なり、一個四錢内外の由

日用品物價

◎白米（一圓に付）●一等白米八升七合●二等白米九升〇〇●三等白米九升三合●四等白米九升六合●五等白米九升九合
◎雜穀　川越白さ一斗〇五合●本場平豆一斗六升●川越豌豆一斗三升三合●鶉隱元一斗四升三合●吉原大豆一斗七升五合●室蘭小豆一斗二升七合●中手小豆一斗四升五合●本場遠廓金時九升七合●銚子隱元八升七合●庄内平豆一斗七升五合
◎鹽　●赤穗三俵六分●大鹽井に八家三俵七分●本齋五俵九分●新齋六俵九分
◎油粕類　●本貫種粕一枚五分七厘●本貫胡麻粕一枚六分三厘●常州菜種一斗四升七八合

雜録

稚遊び。其一

つね子

球繋ぎ

花子　姉さん今日は學校はお休み？
春子　エヽけふはお休みですから、花ちやんと遊びましやう。此處へいらしやい。（と云ひつゝ可愛らしき箱を手に持ち出で、日あたり能き椽に座す。つゞいて花子も同し樣に。
花子　姉さん其は何に？
春子　此の中にはネ、美しく染めた麥稈と色紙があるのですよ。
花子　それで何をするの？

春子　今姉さんが美しいものをこしらへて上げますから、大人しく見ていらしやい。(箱の中より麥稈を取り出し切り始む)。

春子　花ちやん御覧！此をネ五分位の長に切るのですよ。

春子　(又色紙を切り)此は斯う四角くいやうにネ三分位に切るのです。わかつて？

花子　それからどうするの？

春子　今度は此の色紙と麥稈とを、交々糸に通すの。(三つ四つ通して見せる)。

春子　花ちやんわかつて？美しいでしやう。サアこれからは花ちやんが獨りで仕てごらん。(糸を受け取り色紙と麥稈とを交互に數多通ふし、嬉しさうに)

花子　姉さん、此でいゝか？

春子　オヽ大層美くしく出來ましたネ。花ちやんはお上手だこと！然して其兩端の糸を結び合せてごらん、そうすると環の樣になるでしやう？其をネ球繋ぎと云ふのですよ。能く覺へて入らしやい。

花子　姉さん大層面白い事ネヱ。もつと敎へて頂戴な。

春子　モウ今日は此でお止めにして外へ遊びに行きましよう。又次ぎのお休みに他のものを敎へて上げますよ。

裾野の露。

《口繪の畫解き》

五月雨の露もたばしる富士の裾野の夜の嵐、建久四年五月二十八日の昔譚りながら、武士の世なりし三十年の前までは女童も明に之れを記憶せぬものとてあらざりき。否、今も世は猶ほ之れを記憶するなるべし。

征夷大將軍源賴朝が富士野の狩に、鎌倉武士の面

々裾野狹しと假屋を列ねたりし眞只中に於て、曾我の十郎祐成五郞時宗は、賴朝の寵臣工藤左衛門尉祐經を討て父河津の讐を復しき。

文明の今日より見れば其正經の事といひ難きは固よりなるべけれど、當日に當ては天下の共に滿心の同情を以て感歎したる所のもの、而して爾來數百年間の武士亦皆之を理想士人として其士氣を振作したりき。

嗚呼、五月雨の時は近けり。六百八十二年後の五月二十八日は來らんとす。富士の裾野草方に碧りなり。

時事一斑

國民的大同盟

四月二十二日責任內閣自主的外政の二目的を以て全國の志士芝紅葉館に會し國民的大同盟をなすべき準備をなせり。會するものは貴族院議員あり、衆議院議員あり、同盟新聞記者あり、議院外の有志者あり、横に全國に渉り、縱に貴族より布衣に至れり。而して此集りの結果として

全國同志大懇親會

は大に江東中村樓に會せられぬ。五月第八日。西より、東より、南より、北より、大勢潮の如く、人來り滿てり。國民の意向知るべきのみ。

立憲革新黨

政黨革新の機運に乘じ、同盟同志兩政社合して立憲革新黨成れり。

立憲革新黨の主旨

我黨は自由進歩の主義を執り立憲的革新の方針に基き左の綱領を定む

綱領

一立憲の聖旨を奉じ國民の公議に則り上皇室の尊榮を保全し下人民の權利を伸張す
一政弊を革新し責任內閣の速成を期す
一財政を整理し勉めて民業の發達を圖る
一外政は自主的方針を執り國威の宣揚を期す
一國防は內外の緩急に應じ其整備を圖る

東京青年會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京青年會大に會館を神田に開く。君子曰く『活きたる青年を滿たしめよ。』

教育普及の度

我邦に於ける教育普及の度、地方によりて自ら同じからざるあることを、明治廿五年度各師團の募集新兵に徵して統計集誌は報ぜり。

地方	讀書筆算を能くする者	讀書筆算を知らざる者
近衛師團(東京)	八三、六五	一六、三五
第一師團(東京)	八一、六一	一八、三九
第二師團(仙台)	七六、八六	二三、一四
第三師團(名古屋)	六八、三〇	三一、七〇
第四師團(大坂)	七六、二〇	二三、八〇
第五師團(廣島)	七一、七六	二八、二四
第六師團(九州)	六九、〇八	三〇、九一

萬國婦人矯風會員

萬國婦人矯風會の遊説員アンドリユー夫人ブシエナル孃は、客歲十一月世界周遊の途に上り、纜を北米紐育に解きて濠洲南亞弗利加歐洲大陸印度サイアム支那を巡りしが、我邦に來らんが爲に去月二十二日上海を發したり。

疑獄決す

相馬の疑獄は去三日決せり。錦織剛清は誣告罪一等を加重し、重禁錮四年罰金四十圓。山口淳は誣告詐僞收賄俱發にて、重禁錮五年罰金五十圓。後藤新平は證據不充分にて無罪。岡野寛山田重兵衛は事實罪とならざるにより無罪。小山ときは證據不充分にて無罪。帆足清卒は收賄にて重禁錮二年罰金二十圓監視六月。渡邊直賢は收賄にて重禁錮六月罰金十圓。

而して錦織山口帆足は直に控訴し、後藤は撿事の上告する所となりぬ。

韓人獄

韓人の獄、豫審終結したり。謀殺事件に於ては李逸植及び日本人川久保常吉重罪公判に附せられ、權兄弟金泰源は放免。制縛監禁事件に於ては、朴泳孝、李圭完、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鄭蘭敎、朴平吉、徐亮淳、柳萬承輕罪公判に附せられたり。

蓮門敎

蓮門敎會長大敎正島村光津本職を免ぜられ、副敎長島村信修敎師一同信徒總代は、大成敎管長より『其敎會敎長大敎正島村光津免職申付候に付ては、不日何分の可レ及ニ沙汰ニ候條、敎務一切の心得方嚴重に相心得可申事』と命ぜられたり。

毒を以て毒を製す

蓮門敎會を淫祠なりとて「萬朝報」訐き、「萬朝報」をゆすり新聞なりとて「改進新聞」責む。

傍觀者言ふ『毒を以て毒を制す、社會の妙配劑か』と。

夏は來にけり

草色青し、藤花紫なり。天地は夏の舞臺となりける。



小説百家選

小説百家撰は埋想の至極なる者、寫實に達神なる者、文章に妙なる者、語句の奇なるもの、各長所を網羅して餘す所なく續々刊行す

本書を長方形に爲したるは當に奇を求むるに非ず雙手掌中に開閉して讀み易く旅行携帶して運搬の便を實見上より計りたる書也代價の格外に廉なるは所載の諸篇卑しきにあらず讀者をして購ふに吝ならしめす著者の金玉少きも多く頒布せんとてなり乞ふ一本を購て大賛成あらんことを希望す

毎月二回發行毎卷讀切

一册實價十二錢郵税四錢

紅葉山人著 **男ごゝろ** 實價廿五錢 郵税四錢

紅葉山人著 **三人妻** 全五十錢 全八錢

川上眉山著 **小説柴車** 全二十錢 全四錢

川上眉山著 **二枚袷** 全二十錢 全四錢

鷗外漁史著 **美那和集** 全六十錢 全十六錢

紅葉著 **心の闇** 眉山著 **ゆく水** 合本

富岡永洗口畫 菊版洋裝美本 實價金二十錢 郵税四錢

浪六著 **深見笠** 實價廿五錢 郵税六錢

浪六著 **浪六漫筆** 同三十錢 同六錢

櫻癡居士著 **浮世見物** 同廿五錢 同六錢

櫻痴居士著 **夢が夢中** 同廿八錢 同六錢

饗庭篁村著 **小説有馬筆** 同卅五錢 同八錢

坪内逍遙著 **春廼屋漫筆** 同三十錢 同六錢

ちぬの浦浪六著 **鬚の自休**

菊版美裝本 實價金廿五錢 郵税六錢

發行所 東京日本橋區通四丁目(電話五十一番) 春陽堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA